

# モップと ダイヤルの叛乱



制作

竹の子ニュース編集部

協力

越谷委託労働者組合

自治労・越谷市職

埼玉学校委託労働者組合



## 目次

プロローグ・武州越谷騒動今昔……………5

### 第一章 春は陽炎かげろうと共に

1 やってきた夜警たち……………19

2 差別と搾取に怒りの声……………24

3 労働組合をつくらう！……………36

4 守衛と電話交換手……………43

5 組合結成大会……………60

### 第二章 春雷の日々

1 逃げ出した東京ワックス……………67



### 第三章 水郷を襲う強権の津波

1	「ハイエナ」企業登場す……………	139
2	業界アウトサイダーの本性……………	146
3	市役所前にテントを張る……………	154
4	日世、スト破り要員を募集……………	166
5	東京ワックス、七百万円で身売り提案……………	177
6	病院の電話が通じない……………	188
7	恥じて逃げ出す右翼総会屋……………	111
8	東京ワックス観念す……………	123
9	初めてのストライキ……………	104
10	ピンハネ代は僅か30万円……………	96
11	秘書課長と助役の差別発言……………	89
12	人を人とも思わぬ暴力市長……………	80
13	会社逃亡は直営化のチャンス……………	73



7	轢き逃げで深夜の会社追求	195
8	自主就労・ <sup>㊟</sup> 大作戦	204
9	事態收拾を決意する	215
10	市長再び和議成立をご破産に	222
11	玉虫色の四項目確認書で解決	243

#### 第四章 委託の方舟

1	排除策動はねのけ、組合管理貫徹く	265
2	運動の拡大と深まる矛盾	285
3	寒風来たる	298
4	執ような人員削減攻撃	308
資料	組合つぶしはねのけて	319
	越谷市職の闘いの歴史	339

(写真撮影 黒羽裕邦ほか)



プロローグ 武州越谷騒動今昔

①

ジャン、ジャン、ジャン、半鐘がけたたましく鳴り響き、晩秋の肌寒い夜の静けさを破った。

「おい、あれは何だ」

「山火事じゃろうか」

「それにしちゃ、小さな火が幾つも動いている」

武州大沢宿（越谷市大沢町）の町民たちは、町外れにある浅間山の山影に揺れ動いている山火を不安気に眺めながら、口々に不安そうにささやきあった。

そのうち、誰言うとなく「一揆じゃ」という噂が広がってきた。そういえば、今日は昼頃から町方の小者や馬丁、かごかきなどの様子がおかしかった。辻々にかたまって何やらひそひそやっていたのは、一揆の相談であったのだろうか……。

「浅間山に多勢集まって、酒や米を要求しているそうだ」

「要求に応じねば、町方や村方の重立ちおもたに押し入り、打ち壊しも辞さないと言っているそうな」

安政六年（一八五九年）七月、利根川の大洪水で関東各地は大水害を受け、米穀をはじめ諸物価は著しく上がり、小商人や物売り、日雇いなどの生活は困窮をきわめた。このため、各地の貧民は富裕な商家や地主を襲い、義援金や救米を要求して打ち壊しや強訴などの騒ぎを起こした。

武州越ヶ谷・大沢宿の小作人や店借人、日雇いなどの困窮者が徒党を組んで浅間山に集合して、火を焚いて氣勢を挙げたのは十月二十四日の夜半であった。一党は手分けして大沢宿の米屋や酒屋を襲い、米や酒を出させて困窮者達に分け与えた。一党はさらに自身番に代表を送り、義援金や米・酒などを浅間山に持ってこいという要求をつきつけた。

「不屈き子どもが、成敗してくれる」と、名主江沢太郎兵衛は大いに立腹したが、代官所の手の者も間に合わない。

「ここは何がしかの扶持米を与えて騒ぎを静めるのが上策」と、打ち壊しを恐れる地主たちが妥協案を示し、とりあえず仲介者を浅間山に差し向けることになった。

徒党側の要求は、「穀物の値段が余りに高くなって、その日の暮らしもままならぬ。来年三月まで米を安売りし、各人に金子一両を用立ててもらいたい」というものであった。この要求に対して仲介者は、「百姓とて水害のために難儀している故、一ヶ月の間だけ銭一〇〇文につき米一合

の安売りで我慢して貰いたい」と答えた。「もつての外の返答。かくなれば、何分大勢ゆえ中には打ち壊し、押し入りもあるかも知れず、押えようもない」と強引に迫ってきた。

仲介者は照光院に集まった百姓側にこの由を報告したが、百姓側も「六〇日間の米一合安、地代・店賃の二ヶ月分免除」しか譲らない。仲介者が何度も浅間山と照光院の間を往復して結局「六〇日間の米二合安、手当金として一人一分」を与えることで双方の和議が成立した。

浅間山に集まった困窮者は二二〇軒、しめて金五十五両。安売米は銭一〇〇文につき米五合五勺が相場のところを八合売りの切手札が手渡された。この騒動には驚後や高畑の困窮者も加わり、合計二〇〇両の諸費用がかかったという。これを大沢町百姓と、他村の越石百姓が田



浅間山騒擾

畑の所有割合に応じて負担した。

「かかる示談にてはいつまた騒動があるかも知れぬ」と、村の重立ち達が心配したように、これは根本的な解決方法ではなく、その後も事ある毎に貧民たちは徒党を組み、しばしば集合して一揆の気配すら見せたという。幕府、代官所は徒党の取り締りを厳しくしたが、こうした方法でしか生きる権利を主張できなかった困窮者を抑えることはできなかった。

越ヶ谷宿では、このような騒動を防止するため重立ち百姓（地主層）が出資して毎年のように貧民へ金を施<sup>ほどこ</sup>していた。このため地主たちの不満は大きかったが、苛酷な地代を取りたてていた彼らが文句の言う筋合いではなかったのである。大沢宿と越ヶ谷宿のどちらが地主たちに得策であったか、いずれにせよ、村落共同体としての自治や相互扶助が大きく崩れ、無産者が増えるにつれて、貧富の利害対立は大きくなり、このような騒動は全国各地で広がっていった。

## ②

「うーちゃん、どうしたのよ、顔色がおかしいよ。何かあったんじゃないの」

渡辺ミヨ子が、牛島はつ子の土気色した顔を覗き込むようにして言った。このところ牛島のつれあいの具合が悪く、一日おきに仕事を休んでいる状態であった。牛島のつれあいは、草加の石

工として半世紀近く墓石や石細工を彫り続けてきただけに珪肺に犯され、近年はほとんど寝たきりの日を送っていたのだ。

「こんなものが家に来てたんだよ、会社から」と、牛島は渡辺に一通の便箋を見せた。

ありきたりの便箋に、達筆の文字で「お寒くなりました。其の後、永い事御無音の程失礼の至りで御座います。さて当本社人事の示進に依り社員の長欠皆無を行へ受入先の信頼に答へる為、此の二十日にて一在籍の御遠慮をして頂きます故、御諒承下さい、以上 五四・十二・二〇」と書かれている。

「会社を辞めろって言うのかい。樺沢さんはどう言ってるんだい」

「前から休むたびに来なくなっつていいと言われてたからね。言っても無駄じゃないかね」

「それでどうするんだい。この暮になって辞めたら困るんじゃないの。他に仕事を探すっても容易じゃないよ」

「そりゃ分ってるけど。おじいさんがあんな調子だからね。もう少し良くなるまで家にいて看病してやるよ。生活の方は息子たちに何とかしてもらおうよ」

渡辺は笠原綾子や最古参の鈴木ミネらに相談した。共に越谷市立病院ができる前から、工事現場の掃除や片付けをしてきた古株連中であつた。だが、彼女たちが元気づけても、牛島は「おじいさんを放っとく訳にはいかないから、辞めろと言われたら仕方ない」と、諦めるしかないと言

わんばかりであった。

「おじいさんが元気になったら、また戻っておいでよ。そんな時は、オラが権沢に話をつけてやっから」と、ミネが大きな声で牛島を励ました。

「そうだよ。わたしもけがした時、権沢に来なくていいといわれたけど、市役所の塩田さんに

頼んで組合の役員の人たちが、本社とかけ合ってくれて、首にならんだことがあったから、心配せんでいつでも来ればいい」

ぼそぼそ声で牛島を慰めたのは栗原茂だった。栗原も家具職人を辞めてからは、元市長・島村平市郎の助言もあって、市の世話で市役所の清掃に入り、病院の営業開始と同時に東京ワックスの従業員となった古参である。仕事中にけがをして治って出て来た時に現場責任者の権沢から来なくていいと言われたのだった。それを顔見知りの職員に話したところ、市職労副委員長の塩田泰が元請け責任を管理課に追求して撤回させたのだった。もっともこのた



差出人不明の解雇通知を貰って嘆く清掃員

め、この年に日給が二、五六〇円から二、七八〇円に引き上げられた時にも、栗原一人がそのまますえ置かれていた。

「まったくね、ちょっと病気やけがをしたからっていえば、すぐ首になるし。それでいて給料は安いんだからどうしようもないよ」

「子供がもう少し大きければ、もっとましなところで働くんだけどね。家や子供の面倒も見ながら働けるのは、ここくらいのもんだからね」

と、笠原や渡辺がこぼし合った。彼女たちは病院のすぐ側の建売住宅に住んでいた。生活に困るということはないが、家のローンも少なくなく、子供も小さいために少しでも身入りがあればという気持で、市立病院の建設が始まった時から現場仕事に入ったのだった。

「現場はきつかったけど、給料は良かったからね。病院の掃除を頼まれて、あんまり安いんでびっくりしたけど、近くに適当な仕事もないからね」

病院の駐車場の地下に、霊安室や倉庫と並んで「清掃員控室」がある。小さな窓はあるが、一日中陽もささず、天井の高いムキ出しのコンクリート壁の控室には、病院のチーム暖房も、申し訳程度の温もりしか運んでこない。寒々とした気分では一同はそそくさと席を立てて持場へ散っていった。長居していると、休憩中も仕事をして回っている樺沢に見つかって、気まずい思いをしなければならぬからである。

「今度の日曜は出るのかい」と、笠原がエレベーターの中で仲間に聞いた。

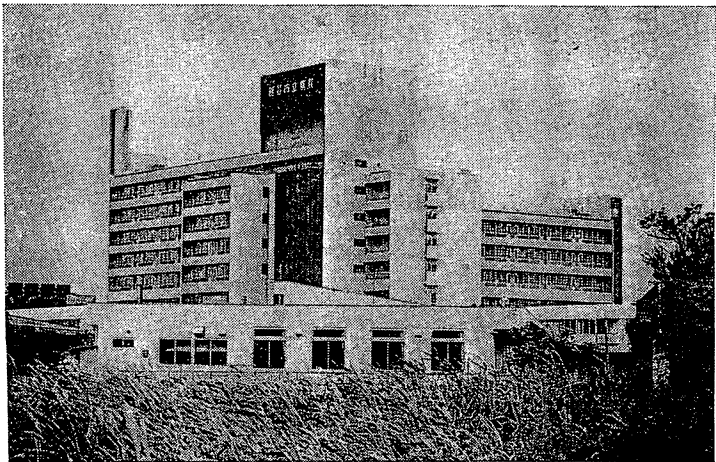
「仕方ないだろう。日曜に出れば三、五〇〇円になるからよ。家でとうちゃんの相手してるよりましたよ」

「とうちゃんの相手は夜だけで十分だよな」と、近くの農家から来ている嫁が真顔で言ったので、皆は腹をかかえて笑った。エレベーターは地の底の様な寒い控室から、暖房の利いた近代的な病棟へ登っていった。

「いったい、いつになったら楽になるのかね」と、六十五歳になるEさんが嘆いた。

「地獄だよ。清掃会社なんて、どこへ行っても同じようなもんだよ」

誰かが吐き捨てるように言った。年の瀬の病室は普段以上に見舞い客が多い。大きなお見舞



白亜の近代病院も、下請け労働者には奴隷病院だった



い品を持って、着飾った見舞い客が廊下や病室にあふれている。

牛島はそんな中を、黙々として掃除して歩いた。情けなくて涙がこぼれそうになる。清掃室に入って、温水道の蛇口を一杯に開いてモップを揺さぶり続けた。もう、この病院に来ることもないだろうと思うと、見舞い客から卑しむように見られ、はいつくばってみがいた床までが妙に懐しくなってきた。

一九七九年十二月暮、牛島はつ子は四年間働いてきた越谷市立病院の総合管理を委託されていた東京ワックスから無慈悲に解雇された。

### ●著者口上

前の話は『越谷の歴史物語第二集』（越谷市史編さん室、発行人＝島村慎市郎）に収められている「大沢町徒党騒擾一件」（本間清利稿）より再構成したものである。後の話のように、長年の間、積りつもった現代の困窮者である委託労働者がついに決起した「越谷委託騒動」の前史そのものといえよう。

越谷市大袋村の代々の重立ちの統領・島村慎市郎市長が、越ヶ谷の地主階級の代理人として、現代の困窮民を力ずくで制圧せんとしたことは、越谷伝来の町民政策からしても異例の圧政であ

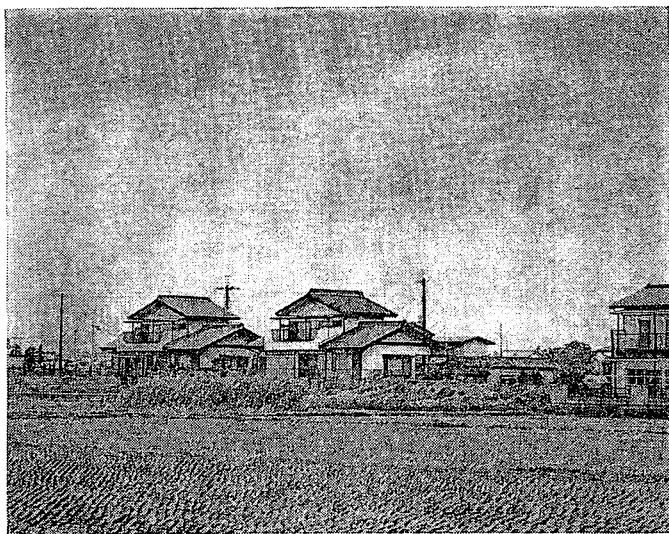
ることが、歴史的に明らかである。

貧民が地主、金持ち階級に富の公平な分配を要求することは歴史的な正義である。二年前の「委託騒動」を教訓化し、貧民のための治政を心がけるどころか、労働者、貧民の要求を「不将ち者征敗してくれん」と王政の刃を振りまわす、時代錯誤の「お代官」島村慎市郎氏の歴史的冥福を祈って本書を上梓するものである。

なお本篇では、越谷市職労や学委労の組合員（三役を除く）以外は、すべて実名となっている。敬称も略し、一部に礼を欠いているかも知れないが、この物語がすべて事実によるものであること、八〇年代を通じてより一層激化するであろう、自治体の下層・下請け労働者の叛乱のはしりとして、やがては一つの史実として伝えられることを期待してのことである。

第一章

春は陽炎と共かげろうに



## 1 やってきた夜警たち

市役所のすぐわきを元荒川がのたうつように曲りくねって流れている。土手の新芽が早春の陽射しの中で勢よく伸びはじめ、浮き立つような陽気であった。

寛永六年（一八二九年）関東郡代・伊奈半十郎忠治が荒川の流れを熊谷付近でせき止め、史野川を開削して入間川に合流させて今日の荒川の川筋が作られた。これ以降、熊谷以東の流れを元荒川と呼ぶようになったのである。元荒川は埼玉東部の水郷地帯（旧北埼玉郡）に入って、宮内庁かも御猟場のわきを抜けるところから左右に大きく蛇行して日光街道と交叉する。このあたりは大沢宿、越谷宿として栄えた宿場街であった。

一九六九年に完成した埼玉県東部最大の威容を誇る越谷市役所は、日光街道から少し東に入り込んだ元荒川に赤茶色のいかめしい影を落としてそびえ立っている。

市役所のわきに架かっている平和橋通りは、東武越谷駅からまっすぐ越谷市中心部を東に貫ぬいている。折しも、今この橋を渡って広い街路をとぼとぼと歩いて行く数人の若者がいる。一九

八〇年三月十三日の午後である。

「あれーっ、どこにも病院なんてないじゃん」と素とほけた声をあげたのはヒロキと呼ばれる一番の若者だ。「橋を渡ってちょっと行ったら市立病院だって言ったじゃないの、衆一！」

「山本さんの話ではそうだったんだけどね」と、衆一と呼ば捨てにされたやや年長の青年が小首をかしげる。

橋から下る坂道を降りきると、造成はされたが放ったらかしの空地が広がっているという田舎道であった。ぼつん、ぼつんと何軒かの家が広い街並の両側に見られるが、見渡したところ病院らしい建物はない。

「田んぼの真中だって言うから、もう少し先じゃないか」と、分別くさいギョロ眼を度の強い眼鏡の中で動かして先を促したのは、阿藤と呼ばれるずんぐりした青年だ。

さらに数分歩いて行くと、街並の切れた先に忽然と八階建ての白亜の大病院が陽射しを一杯浴びて光り輝くように浮かび上がってきた。

「ひょーっ、あんなでかいのかよ」と、ヒロキがたまげたように言ったので、皆どっと笑ったが、確かに想像していたよりは立派なものであった。

「総工費六十九億円、ベッド数三百床の埼玉県東部一の大病院で、黒田革新市政最大の目玉商品だったからね。もっとも今では累積赤字三十億で島村保守市政最大のお荷物になっている」と、

衆一がかつて山本に聞いたことを受け売りして解説した。

「いきなり行って、おぼちゃんたちに何を話したら良いんだろうね」と、ヒロキが悩んだように言う。

「まあ手ぶらで行くのも何だから、その辺で茶菓子でも買って行って、茶飲み話をしながら話したらええんでないの」と、阿藤が如才なげな知恵を出して無意味な論議を抑え込んだ。丁度うまい具合に、病院の手前に駄菓子屋が一軒ぼつんと建っている。懐具合に見あった出来合い菓子しかないのも都合がよい。

越谷市立病院の周囲は、さつきやつつじの植込みでところどころ区切られており、良く手入れされた芝生が広がって、開放的な雰囲気をかもしている。芝生や広い駐車場の隅々まで清掃が行き届いて、紙屑一つ落ちていない。建物はもち論、真白に輝いており、大きな窓はみがきぬかれ、陽春の陽射しに光り輝いている。

「こんな立派な病院にこんな格好で入っていいのかね」と、フジケンがうす汚れたコートのをえりをかき合わせて、いささかひるんだように言う。

そう言われて見れば、確かに男たちの風態は清潔そうな白亜の病院や、そこに通う小奇麗な「市民」達とおよそ不釣合いな異彩を放っている。男たちの大半が肩先まで長髪を垂らしていること。足元もドタ靴あり、すり減った革靴あり、運動靴ありでおよそまちまち。だが何よりも

彼らの異形さを示すものは、ヒロキ達が着込んでいる古びた草色の木綿の半外套であった。今日ではちょっと見られなくなった一昔前の木綿の半外套のひじや袖口はすり切れ、色あせた染色が如何にも風雪をしのげせる。その胸元にししゅうされた社名も、糸がほつれてかろうじて「東京クリーナー」と読みとれる。

「まあ、僕らはマナビヤのふくろう、日蔭者の夜警だからね。夜の職場では姿形は問題じゃないが、明るい陽射しのもとでは見すばらしさもやむをえないよ」と、衆一がヒロキをなぐさめるように言う。「僕らの制服が新調されないのも、県の委託化政策のせいなんだから、オバちゃんたちには分ってもらえるよ」

今まさに陽春の光を一杯に浴びた市立病院に足を踏みこんだこの若者たちが、埼玉県の学校警備員であることが彼らの会話から明らかとなった。男たちが着ている冬物の野ぼったい外套は、県の学校警備員が当時の雇用主であった㈱東京クリーナーから十年前に支給されたものであり、多くの警備員がほころびをつくりながら、未だに大事に着続けてきたものである。

だが、その胸元に縫い込まれた「東京クリーナー」という名の会社は、現在では存在しない。東京、埼玉でビル管理業を大々的に営んでいた同社は、一九七八年七月に何の前触れもなく倒産してしまった。

男たちの現在の雇用主は「㈱学校警備」（代表・神保節子氏＝ムサシビルクリーナー役員）という名目だけの委託会社である。同社は東京クリーナー倒産によって委託先を失い、労働者側から突きつけられた「直営化」の要求を何とかそらすために県教育局幹部の枯息な入れ智恵で、県内主要業者が協同してデッチ上げた名目だけの「学校警備員用の受託企業」である。

このような事情で、埼玉県の県立高校と養護学校一六校の警備員のすべてが、すでになき前雇用主から支給された十年前の木綿の外套を、それも一枚二名で交代で着用し続けてきたのである。このせちがらい事実こそ、委託労働者である学校警備員の置かれている様々な矛盾を象徴するものである。

この異様な風態の若者が、越谷の水郷地帯にそびえたつ「白い巨塔」に登場したのは、それなりの理由がある。

彼らは「埼玉自治体委託労働者労働組合」東部第一分会の組合員であり、かねてから共闘関係にあった「自治労越谷市職員組合」の紹介によって、同じ委託労働者である市立病院の清掃労働者と交流しようとしていたのだ。青木衆一（埼玉労書記次長兼組織強化部長＝当時）が市立病院で働く委託労働者の存在を知らされたのは、つい最近のことであった。

「うちの病院では清掃と電話交換、守衛が東京ワックスという会社に業務委託（下請化）されている。最低賃金以下のひどい条件で、仕事中にケガをしただけで辞めさせられそうになっただけ



いだ。僕らもあまりひどい時には応援しているが、おばあちゃん達が多くて、なかなか労働組合をつくるというところまでいかない。年も随分ちがうし、市の職員ということで今一つじっくり話し合ふところまでいっていない。同じ委託労働者ということで、そちらからも話してもらえないだろうか」

当時、県下の委託労働者の実態調査をしていた青木らは、「話だけでも聞いて見よう」と、軽い気持でこの日初めて越谷市立病院を訪問したのである。

## 2 差別と搾取に怒りの声

「組合のことでちょっと下に行ってくださいから」と、山本は職場の同僚に声をかけて、素早く縦縞の白衣をおった。

越谷市立病院では、医療に直接従事する医師や看護婦は白のガウンや制服を着用し、山本のように消毒などに従事する現業職員や臨時職員は、縦縞のガウンを着ることになっていた。同じように、白衣とはいっても隠然たる区別がそこにはあった。

「僕も最近話してないから、一諸に行つて話を聞いてみよう」と、山本は先に立ってエレベーターに乗り、地下行きボタンを押した。「やっぱり委託は地下に押し込められてんだね」と、青木がため息をついた。

病院の地下から一たん外に出ると、小さな駐車場に面して霊安室やシツ倉庫、清掃員控室が並んだ地下壕のような部屋がある。この一画だけが、建物とは別建てになつていて病院の大駐車場の地下に造られている。病院の建物側には清掃専用エレベーター室に直結したゴミ出し台と、地下玄関の側に用度係の事務室と倉庫があつた。この地下壕の端に「東京ワックス従業員控室」という粗末な木札が架けられている。青木が嘆いたように、仕事は病院の中でさせても、その身分は敵として病院外にあることを明白にそれは表現していた。

同じように地下室にあつても、用度係の事務室や倉庫は病院の建物の中にあり、地下玄関に面した窓からは幾らかでも直射日光が入るようになってゐる。しかし、十数名の労働者が激しい労働の合間に憩う「清掃控室」は、陽の当らない小さな窓が一つしかなく、重い鉄の扉にはさび止めの赤いペンキが素気なく塗られたままである。これに較べて医師たちの休憩室や研究室は八階の最上階にあり、春の陽射しの中で輝き揺れる「太陽と水と緑の町・越谷」全域はおろか、遠く筑波山や富士山まで眺め渡せるようになってゐる。まさに「差別」は、こういう所にも歴然と現われるのである。

マナビヤの鼻くわらとして、四畳ばかりの狭い警備室の中で青春を過ごして来た青木の眼底には、会社倒産騒動の最中にうそ寒い警備室の中でひっそりと息をひきとった老警備員の姿が焼きついている。陽の当たらない地下壕の扉を見た瞬間、青木はその時の怒りをまざまざと思い出した。山本はそんな青木の戸惑いも知らず、扉を大きく開けて控室の中へ入っていった。

「こんにちは山本さん、今日はどうしたのよ」

いつもの調子で元気に声をかけた清掃員たちが、山本の後に続いた何人もの若者を見て、ぎょっとしたように声を止めた。青木らは、山本に従って中へ入ると壁際に一列に並んだ。天井の高い薄暗い控室の中には、十数名の年配の清掃員たちが休憩していた。相当の高齢のおぼあちゃんがいる。農家の嫁らしい中年の清掃員が、そそくさと立ってお茶を入れてくれた。若き夜警たちとおそうじ小母さんたちの最初の出会いには、一種ぎこちない雰囲気が始まったのであった。

「今日は皆さんと同じような委託会社の人たちがつくっている労働組合の方を紹介に来ました。私のような公務員より委託のことを良く知っている人たちです。何でも気楽に話を聞いてみて下さい」

小母さんたちの反応は、初対面にしては素直なものであった。山本という病院内での顔馴染みがあったせいもあるが、聞かれたことには何でも隠し立てせず、遠慮なく自分たちの意見も言った。彼女たちが口々に話してくれた東京ワックス従業員の労働条件は、想像以上にひどいもので

あった。

清掃員たちの多くは、日給二、七八〇円で、埼玉県の「法定最低賃金」(二、六八〇円)スレスレであった。それも、前年末に市職の山本が病院当局に最賃法違反を指摘し、勤務年数の長い者がようやくその年からかろうじて最低賃金を上回るよう改善されたものである。だが、仕事中のケガを口実に解雇されかかった栗原は、前年の二、五六〇円にすえおかれていた。

「私が入った五十年は、日給が二、三〇〇円でしたよ。それまで病院工事の片付けや掃除をしていた時は三、五〇〇円くらい貰っていたから、あんまり安いんでびっくりしたのを覚えてるよ」

「私はその次の年、病院が開業した年に入ったんだけど、二、二〇〇円しか貰わなかったよ」

「それは、後から入った人と前からいる人と同じじゃうまくないってんで、一〇〇円安くしたんだよ」

「それからは毎年給料が上がったんだよね、毎年たったの五〇円ずつだけ。一度だけ、おとしだったかに一週に一〇〇円も上がったんで皆で喜こんでいたら、それまでであった皆動手当がなくなったんで、びっくりしたんだよな」

「そう。月二七日皆勤すると、二、〇〇〇円貰えてたのがなくなったから、一〇〇円上がっても結局同じなんだよね。私らは月に七〇〇円しか上がらなかったんだよ」

「私らは、今でも二、三〇〇円しかもらっていませんよ」と、昨年入ったばかりの何人かの清掃員が叫んだ。「ボーナスだって、暮に一万円もらったただけだから」

田島千歳は病院ができてから二年ほど働いていたが、あまりの低賃金に耐えかねていったん辞め、争議の終ったこの年の八月から復帰した清掃員である。

「お父さんが病気で働けなくなって、日給二、二〇〇円じゃとてもじゃないが食べていけないよ。それで個人病院の家政婦兼付き添い婦になった。当時でも朝八時から夕方四時半まで五、五〇〇円くらいになりましたね。夜勤の付き添いをやると七、八千円になり、何とか一家三人で食べていけました。ただ、病院の床の上にゴザを敷いて仮眠するような有様で、とてもじゃないが長くは続かないですよ」と、当時の賃金がいかに低いものであったか述べている。

このような低賃金のため、わずかの割増金ほしさに日曜・祭日に出勤する者が多く、盆も正月もゆっくり休めない。月三回の公休日以外休みなく働いても、男で八万円そこそこ、女では七万円にしかならない。償与とて、夏と冬に二、三万円出るだけであり、とうてい生活の足しになるものではなかった。

「病気のじいさんを抱えて、どうして七万円ばかりで食べていけるか。それでももう年だから、今さらどこにも働き口がないので、どんなに具合が悪うても、休みもせず五年間必死で働いて来たんです。何とかなるものなら、どんなことでもしますから給料を上げて下さい。お願いしま

すよ」

六八歳になるおばあちゃんは、孫のような夜警たちの手をとらんばかりにして訴えかけた。彼女以外にも病気の亭生や飲んだくれの亭生を抱えた者。配偶者に先立たれて息子の嫁に気兼ねしながら同居している老婦人もいた。ほとんどの者がそれなりの苦勞や悩みを抱えて、わずかばかりの賃金を求めて、我慢しながら働いて来たのであった。

多くの委託労働者や工場の女性パートがそうであるように、有給休暇や生理休暇など望むべくもない。希望者には厚生年金や健康保険の加入も認められるが、高額な保険金を嫌って加入する者はほとんどいない。会社もまた会社負担分を払わないで済むため、あえて加入を勧めない。それどころか、法律で義務づけられている雇用保険すら加入させていない。病氣やケガで休めば遠慮なく日給が削られ、休みが度重なりと現場責任者から「もう来なくてよい」と無慈悲に言われて、あっさりクビになってしまう。

このような事情で泣き泣きやめる人が後をたたず、常に人の出入りが激しかった。もち論、何年勤めようと一銭の退職金も貰えるわけではない。委託事業とはまさに使い捨て職場、現代版うば捨て山といっても過言ではないのである。

かと言って、仕事が楽かというところではない。清掃員はこの当方で十七名いたが、現場責任者の権沢はほとんど仕事をしていない。わずか十六名で、一万六千平方メートルの病院本館と、エネル

ギーセンター棟、外来食堂、看護宿舎など約六千平方メートルの床面と階段を毎日掃除しなければならぬ。一階、二階の外来は土足の患者達がひっきりなしに訪れ、一日に何度も掃除機をかけ、掃除をしなければならぬ。四、七階の病室は入院患者も多く、浴場、便所など念入りな清潔さを要求される所が多く、時として失禁した患者の後始末までやらなければならないのである。

日曜、祭日にはワックスがけの作業があり、年に何度か蛍光灯や天井の掃除もしなければならぬ。まさに年中眼の回るような忙しさであり、たえず清潔さが要求されるだけに、目につかない所での労力は計り知れないものがある。

しかもこれだけの仕事をするのに、人数は年々減らされるばかりであった。開設当初の五一年には定員が二一名であったのに、今年はついに十八名。それも一名は補充されないまま十七名（実質十六名）で、年々増える仕事をこなしていかなばならなかったのである。

労働組合ができるまでの「東京クリーナー」従業員も似たようなものである。「行政改革」が叫ばれると、真先にしわ寄せを受けるのが委託労働者である。民間下請けに業務委託する自治体が増え、委託料も競争入札によってどんどん切り下げられていく。

委託業務は建て前上「競争入札」であり、もっとも安い価格を出した業者に落札される。このため、新規割込みをはかる業者がダンピングすれば、既存の業者も値下げせざるをえない。もと

もと荒利益が十〜二十パーセントしかないビル管理業では、勢い労働条件の切下げを行わざるを得ない。定年退職者やパートの主婦層、学生アルバイトなどの低賃金労働者を雇用し、社会保険や労災にも加入しない。償与も少ししか払わず、極端な場合は償与直前に従業員をいびり出したり、辞めた従業員の補充をせずに経費の節減を図るのである。

このため、労働者自体もこのような低賃金を承知で、他に働き口がないものしか集まらない。越谷のような農村型の都市では、高齢者や農家などに比較的低賃金でも働く労働者がいる。だが、誰も好きこのんで低賃金で働く者はいない。自治体の理事者や契約担当者が労働組合を嫌い、このような低賃金で「満足して働く人がある」という時、彼らは書類上の操作で人の生き血を売買する奴隷商人と何ら変わるところがないのである。

「私らは病院の建設が始まった頃に、藤田建設の下請けに入って現場の掃除や片付けをやったんだよ。それで、病院が出来ると中の清掃をやってくれてんで、東京ワックスが契約する前から働いていたわけ。給料はガクンと安くなったけど、子供も小さいし、家から近いところっていうと病院しかないからね。我慢して働いてたわけよ」

渡辺や笠原は、病院の掃除を始めた事情をこのように述べている。同じ頃入社した秋谷も近く  
の農婦であり、会社勤めは生まれて初めてだが、とにかく近いというので応募したのであった。

当時の日給は二、三〇〇円であり、石油ショック後の物価高の中でとうてい暮していけるもの



ではなかった。それから五年の間に、多いものでもわずか四、五百円、少ない者では二、三百円しか賃金が上がっていない。会社に幾らかけ合っても駄目、病院の管理課長にお願いしても効果なかった。彼女たちが「組合なんか作っても……」と、渋るだけの事情があったのである。

「なんせ委託料が安いので、会社も赤字なんだから、組合なんか作っても上がらないよ」

その時、限のデスクに座っていた小柄な男が口を開いた。「現場責任者の権沢だよ」と山本が青木に耳打ちした。

確かに、委託料の安いことが低賃金の最大の原因だ。だが、その低い委託料の中から会社はさらにピンハネする。青木らの前の雇い主である「東京クリーナー」倒産の原因は、ピンハネ分や委託料を過大な不動産投資に回して、石油ショック後の土地暴落で資金繰りがつかなかったからであり、不当で過大なピンハネそのものにあったと言える。あるいは少なからぬ委託会社では職業安定所を通じて高齢者を採用し、「高齢者雇用給付金」をそっくりネコババするという例もある。青木や阿藤は業者の言う「委託料が安いから」という口実を言葉通りには受けとることが出来なかった。東京ワックスは熊谷に本社があり、埼玉県北部では相当のシェアをもつビル管理会社である。何のメリットもないのに、わざわざ埼玉県東部に進出して五年間も越谷市立病院の委託業務を続けているとは考えられなかったのである。

「あんたは黙って下さい。会社の管理職だと言っても、何の権限もないんだから。皆と力を合

わけて会社と交渉するなら構いませんが、そうでないならばっきり言って邪魔することになりま  
すからね」

阿藤が樺沢を睨むようにして言った。樺沢がいると、何となく話しくいという雰囲気があつ  
たからだ。樺沢は黙って出て行った。

「ほんとに現場責任者なんて言っても人一倍仕事をするだけで、こういう時には何の役にも立た  
ないんだから」と、笠原と同じく病院の近くに住んでいる若い渡辺ミヨ子があいずちを打った。

「そうは言っても、責任者がやってくれねば、組合つくろうたってまとまらないし……」と、水  
上という六〇半ばの男が隅の方で呟やくように言った。

「そうだよ、何てったってそのための責任者だからな。威張るだけが能じゃねえ」と、少しピン  
トのずれたあいずちを打ったのが、中台という七〇過ぎの元氣な男である。男たちはこの時まで  
ほとんど口を開かなかつたのだが、樺沢がいなくなったせいか、重い口を開くようになったので  
あつた。

「樺沢にはなんも言えねえじゃねえけ、男衆がもつとしっかりしてもらわんとな」と、女たちが  
ひやかした。

「樺沢さんだって権限はねえし、言ってもどうしようもないからな」と、水上は諦めたように言  
う。愚知は言いあつても、さてどうするかとなると腰を上げるものがないらしい。夜警たちは

再度の訪問を約して、今日のところは引き上げることにした。

夜警たちが帰った後、詰所の中はガヤガヤと蜂の巣をつつついたようになった。何の前触れもなく突然に「組合の人」が、それも顔馴染の山本だけでなく、見ず知らずの「埼委労」と名乗る若者が何人も現われて、「組合をつくろう」と呼びかけてきたのだ。年配のバアちゃんジイちゃんが戸惑うのは当然であった。

そこへ樺沢が帰ってきて、口々に話していた一同をジロリと眺めわたしたので、皆口をつぐんでしまった。「組合の連中は、仕事もしないで放っつき歩いて銭をもらってんだ。あんな連中の言うことを聞いたって、こっちが損するだけだぞ」と、樺沢はキメつけた。

そう言えば、二、三年前にも当時の現場責任者が、皆を代表して会社に申入れたり、組合をつくろうと言ったりしたことがあった。だが会社は、「組合をつくるなら辞めてもらおう」と恫喝し、その責任者もいや気がさして辞めてしまったという。

「さあ、いつまでも油売ってねえで、仕事だ、仕事だよ」と、樺沢が皆をうながした。一階の持ち場に出かけようとした水上に、樺沢が「水上さん。明日は栗原さんと味覚糖に行ってくれよな」と声をかけた。「明日の日曜ですか。明日は一階と二階の定期清掃（ワックスがけ）をしねばならんですよ」と、水上は洩った。

「病院の方はいつでもできる。工場の都合でどうしても明日じゃないと困るといふんだ。いつも

のように二百円つけるから、やってくれよ」と、樺沢は命令するように言った。

味覚糖とは、隣町の春日部工業団地にある全国的に有名な飴会社であり、東京ワックスでは、その工場の定期清掃を請負っていた。だが、熊谷に本社のある東京ワックスから作業員が派遣されるわけではない。当日の朝、東部地区の担当者がライトバンに乗ってきて、水上や二、三の従業員を乗せ、市立病院用の機材を積み込んで出張作業するのである。こうした病院外の作業所は、越谷市内の佐藤医院など他にも若干あったが、これらは清掃員でも簡単にできるものであった。だが、広い味覚糖の宿舍や事務所を二、三名でワックスがけするのは楽な仕事ではない。

「二百円余分に貰っても合わない」と水上は思っていたが、「現場責任者補佐」という立場から行かないわけには行かなかった。栗原さんは、何を命じられても決して嫌といったことのない、曲りかかった背中をかがめて一日中黙々と働く人であった。「ちょっとケガしたくらいで首にして、結局は重宝して使ってるんじゃないか」と、水上は樺沢の御都合主義的な人の使い方に対してちょっと腹が立ったが、「はい分りました」と答えた。

味覚糖の現場は、市立病院が始まってから間もなく続いており、病院の要員が病院用に購入された材料を使って、勤務中に民間の事業所で働くのは二重契約であり、大袈裟に言えば公共物の横領である。だがこの五年間、誰もこのことを不思議と思わず、むしろ会社の経営努力として認めてきたのである。

「ばあちゃんは どう思うの」と、渡辺は同じ階の病棟を担当している鈴木ミネに聞いた。「さっきの若い衆らの話」

「もつともじゃないの。ワシらの若い時でも元気の良い衆は赤旗振ってやっとなぞ。ワシも元気な頃は男衆と一緒に所長や偉い人に掛けあったこともあるわ」と、ミネは渡辺が聞きたかったことから少しズレた返事をした。ミネはかつて大手の建設会社の飯場で女たちを仕切っていたくらいの上り者であり、日頃から「病院の男衆はみんな意気地がねえ」と嘆いていた。

「話はええことばかりじゃけど、ちょっと恐いような気もするね。市職の人が本当に応援してくれるんなら心強いけど、埼委労とかいう組合がよう分らんし。やっばり、うちの男らがちゃんとやってくれねば、女だけじゃどうにもならん」と、後の方は自分に言っているように渡辺は呟いた。耳の不自由なミネは、自分の言いたいことを言うと、さっさと病室の掃除に行行った。

### 3 労働組合をつくろう！

委託労働者の組織化は埼委労にとっても大きな課題の一つであった。東京クリーナ労組から一

九七八年三月埼玉労に組織変更したのは、分割発注（複数の下請け化）に伴う組織分断に備えるものであった。隔日勤務闘争の勝利によって、県警備は当面小康状態にあったが、県教育局は学校無人化の希望を捨てていない。川口市でも分割発注や幅寄せ（業務縮小）などの攻撃の恐れが多分にあった。県警備の老人たちは、自ら生命を賭して闘った隔日勤務闘争の成果に自足し、委託制度撤廃・直営化という抜本的要求を掲げて再び闘おうという気概は乏しかった。このままでは、より大きな攻撃が掛けられたら一たまりもない、というのが埼玉労の若手役員たちの共通の危機感であった。（当時、一校一人の連続勤務から、二人での交代勤務になったばかりであった）

このために千葉共闘部長は、県下諸労組との交流共闘を強化しようとし、当時の井上情宣部長は組合員の意識向上に心を痛めていた。青木は、「埼玉労の強化は、県警備の団結強化ということだけでは達成されない。委託労働者の全県組織として組織の拡大・強化を図らねば、県当局の無人化攻撃、差別分断政策をはね返すことはできない。このためには、未組織の委託労働者の組織化に取組まねばならない」と考えた。青木は執行委員会や書記局会議において、再三この趣旨を繰り返し、他の役員や若手活動層の同意をかちとってきた。だが、一般的な方針として決定されても、未組織の組織化は容易なことではない。

当時の埼玉労が手がけた組織化の一つに、川口の「百合の家」がある。これには書記局次長の井上茂樹や書記局員兼本部業務員で、行動の自由が利くK・Sが主に担当した。今一つが、越

谷・草加を中心にした東一分会での組織活動であり、その最初の試みが越谷市立病院・東京ワックス従業員の組織化であった。養護施設「白百合の家」の場合は、市立の保育所や幼稚園の現業労働者の多くが埼玉労に組織されている関係で、最初から埼玉労への組織化を目標にして活動がなされた。

だが、越谷市立病院の場合は、清掃十七名、電話交換四名、守衛七名というまとまった委託事業所であり、越谷市職との関係もあつた。最初の訪問の経過を報告した青木に対して、このような事情を踏まえて、「どのように組織すべきか」という質疑があつた。

「最終的には東京ワックス従業員が決める問題だが、市職や我々はできれば市職・埼玉労の双方へ二重加盟するのが組織上望ましいと考えている。我々埼玉労としては、委託労働者の広汎な共闘機関として埼玉労を具下に広めていくためには、個人加盟よりも独立組合として加入を進めた。市職の場合は、現業評議会の一部としてでも参加できないかどうか検討している。いずれにせよ、組織加盟する時は埼玉労、越谷市職の双方に、それが難しい時は共闘会議方式をとって、三者が共同で運動していくのが現実的だと思う」と青木は答え、基本的な考え方として書記局会議で承認された。

これは、越谷市職の側から「委託労働者という点では埼玉労の方が小母ちゃん達と親味になれるし、対業者闘争の経験も豊富だ。だが、直営化を求めていく場合は、市との交渉力や越谷地区

における組織的な力がなければならぬ。この点で、一般的な支援より、市職の中に入れてしまえば市長といえども委託問題で交渉の場に出てくるだろう」「どちらが欠けてもワックスの鬮いは難しい」という意見が出ていたためである。

越谷市職では、「直営化されていればとうぜん組合員になっているのだから、委託労働者を準組合員として加入させることができるのではないか」と、考えていた。だが、越谷市職が自治労本部へ問い合わせしたところ、「自治労の加入条件は自治体に直接雇用されている者（臨時職員を含む）となっている。未組織の委託労働者を何らかの形で組織することは急務だが、どういう形で組織加入を進めるかについては検討中で、例も少ない」と、いうことであった。

「自治労は下請け化・民間委託化には反対するが、押し切られた場合は、導入された下請け労働者を組織対象から外してしまい、全国一般などに組織化を委ねてしまう。が、これでは組織内に非組合員を増やすのと同じであり、下請けとの賃金格差は公務員攻撃の材料にもされてしまう。このままでは、将来的には大きな問題となろう。現在の下請け合理化の風潮の中で直営化をかわれば、極めて大きな意義がある。そのためには、自治労の加盟条件を、委託であろうと下請けであろうと、全ての公共団体の業務に従事している労働者に広げるべきではないだろうか」と、市職の役員の中にはこのような積極的な意見を述べる者もいた。

「実情では、今すぐ委託労働者を組織加入させることもできないし、かと言って、埼委労単独加



盟は対市交渉の上で得策ではない。当面は独立組合として結成して貰い、「共闘会議」を三者で構成し、市職と埼玉労がそれぞれの有利な面で積極的に支援していこう」という、現実的な意見が実際の展開として採用されたのである。

埼玉労では、この趣旨に沿って三役出席の書記局会議で、「東京ワックス労組の組織化には、埼玉労自体の課題として積極的に支援していく。当面の担当は、青木・千葉両執行委員が当り、東部第一分会が中心となって日常活動の支援をする」ことが決定されたのである。

「こんにちは、またおじゃまします」と、元気よく声を掛けながら清掃控室に入る。もう三度目の訪問であった。今日は小人数で、ざつくばらんに小母ちゃんたちの本音を聞こうということ、ヒロキと安原、山本の三人だけであった。最初と二回目の訪問では壁際に一列になって、順番に「お話しする」というようなギョチなさがあった。今日は、勧められるままに椅子に座った。

「みなさんの状態については、市職執行委員会で報告して支援決定をしてもらいました。埼玉労でも支援決定したと聞いています。その他にも市内の労働組合に呼びかけて支援共闘会議をつくる努力もしています。今日は、具体的に労働組合をどうして作るか。作ってどのよう運営するか。今年の契約に際して、会社にどんな要求を出していけばよいかを話してみたいと思います」

と、山本が話し出す。

組合活動について一通りの説明をした後で、質疑を求めると、牛島はつ子が立ち上がった。「組合に入ると、辞めさせられないで済みますか」と、消え入りそうな声で聞いてきた。

一瞬、その意味がよく分らなかつたが、渡辺らの話によると、牛島が最近また会社から「辞めてくれ」と言われているのであつた。昨年の暮に奇妙な解雇通知が送られて来て、いったん辞めていたのだが、三月になって「人手が足りないから来てくれ」と樺沢に言われて仕事をしていたのだが、年度末になって正式に解雇されると言うのである。

「何とかならないもんかね。ちょっと休んただけで首になるなんて、安心して働らいてられないよ」

他の者も口々に不安そうに言った。みんなの中で何とかしたいという気持が強くなつて来ると安原と山本は判断した。

「こうなれば一日も早く労働組合をつくるしかないんじゃないか。理由なく解雇されたり、賃金差別をなくすためには、皆で団結して会社とちゃんと交渉することですよ」

「会社が話し合いに応じるだろうか。今までだって、何度も話し合いたって言ってたんだよ」  
「組合なんか作ったらクビになるんじゃないの」

「大丈夫ですよ。市職や埼委労もついています。栗原さんの時にしたって、本社へ抗議したか

ら、本社では辞めろとは言っていないということで撤回になった。全員のクビなんか切ったら、会社としては委託業務を続けられなくなってしまふ。絶対大丈夫ですよ」

「私たちは組合に入ってもいいよ。でも、役員やなんかは出来ないから、男の衆にやってもらわないとね」

女たちが、水上や栗原の方を見て、

「水上さん、やって下さい、お願いしますよ」と声をそろえて言った。

水上は戸惑ったように考えていたが、やがて立ち上がって、「何にも知りませんが、皆が力を合わせてやるというなら、自分もやります。役員だけに任せるというのではなく、皆が助けられるならやらせて貰います」と、腹をくくったように言った。

「労働組合なんか難しいことじゃない。法律的なことだって、やってるうちに自然に分ってきますよ。僕たちもできるだけの協力はしますが、一人ひとりが積極的に協力しあえば、必ず成果はあがるはずです」と山本が励ました。

「よろしく願います」と、女たちが一斉に声を挙げて拍手をした。あっけなく組合結成が決まったのである。

「中台さんも、栗原さんも協力してくれねば、組合を作ったら男たちがしっかりせねばいかんのだから」

「よっしゃ任しとけ、会社の人間がえらそうに言つて来たたら、蹴ちらしてやる」と、中台は威勢よく答えた。栗原は何も言わずに笑っている。口下手で普段からも余り話したがらない男で、黙つて蔭日向なく働き、年寄りや困っている者の面倒を良く見ていることを、水上は知っていた。不安もあるが、こうなつたら仕方ない。これ以上、犠牲者を出さないためには、山本や埼玉労の人々を信じて、労働組合を作るしかない。頼りな気な小母ちゃん達を見ていると、自分なりに人のために尽してみようという気持がようやく湧いてきた。

#### 4 守衛と電話交換手

三月三十一日(月)、清掃控室は再び人で埋まった。埼玉労から青木、千葉ら五名。市職から山本のほかに臨職の山田なども加わつて、熱っぽい空気が漂つた。組合の作り方や団結の重要性、委託の賃金事情などについて市職、埼玉労の役員が話した。阿藤は「一人ひとりの生活実態に根ざした要求が闘いの武器となる」と言い、用意していた実体調査・生活要求のアンケートを全員に配布して書き方を説明した。組合の規約も提案され、できるだけ分りやすく簡単なものにならう

ということになった。

一通りの話が終ると、結成準備委員を決めようということになった。前日名乗り出た水上が栗原を推せんした。だが、女たちの意見がまとまっていなかった。山本が元氣者の笠原や渡辺を促したが、日頃の齒切れの良さと打ってかわって、あいまいな返事であった。

「組合とか、役員とか言うのは男の人がやるもんじゃねえか」というのが、彼女らの常識であったのだ。

「そんなことを言っても、現実には女の人が多いんだから誰かがやってくれなきゃ駄目だ。やったことがないとか、うまく喋れないとか言っても、男の人たちだってそうだ。どんな闘争だって始まりは必ず女性が大きな力を發揮している。やってやれないことはないんですよ」と、安原がいささか業を煮やしたように、女たちを促した。

「そうじゃ、私らだって若い時は荒くれ男に負けんかったよ。若いカアちゃんたちがやってくればいいんだ」と、鈴木ミネが大きな声で、笠原や渡辺の方を向いて言った。やれるとしたら彼女たちしかいない、というのがこの場にいる者たちの共通の判断であった。ミネは皆を代表して言ってくれたのだ。

「じゃ、後でどうするか相談して、女たちでもやる人を決めますから」と、渡辺が意を決したように言った。

話はようやくまとまり始めた。四月上旬に新年度の委託契約が正式に行われるので、組合結成を四月四日に行い、直ちに当局、会社と新年度の労働条件について話し合う。そのため、生活実体と生活要求の調査を行う。電話交換手（四名）と守衛（七名）については、結成のメドがついた時点で組合への参加を呼びかけることが決められた。

### 越谷委託労働者組合規約（一九八〇年五月二十六日名称変更）

- 一 名称 この組合の名称を、東京ワックス労働組合とする。（越谷委託労働者組合）五月二六日改正）
- 二 事務所 この組合の主たる事務所を、越谷市東越谷一〇―四七―一市立越谷病院内におく。
- 三 権利 組合員はすべて平等の立場でもって組合のあらゆる活動に参加することができる。何人といえども、性別、門地、思想、信条の故をもつて不当な扱いをうけない。
- 四 義務 組合員は組合費を納入し、その条件に依りて可能な限り組合活動に参加する義務を負う。
- 五 資格 この組合は地方公共団体の事業委託者である東京ワックスに勤務する委託労働者をもつて構成する。（越谷市周辺の地方公共団体等の事業委託者に雇用されている委託労働者及び右地域に居住する）五月二六日改正）

- 六 役員 組合には世話人である執行委員若干名をもって構成する執行委員会を設け、日常的運営を行う。  
執行委員及び代表者（委員長）と会計監査一名以上は役員選挙において過半数の支持なければならぬ。  
組合は執行委員会の決定に応じて上部団体等から特別執行委員を選ぶことができる。但し代表役員となることはできない。
- 七 大会 組合員大会は年一回以上開催し、委任状を二分の一まで有効とする過半数の出席を得て成立する。  
大会は役員選出、会計報告、主要活動方針、上部団体への加盟、スト権の確立を議決する。
- 八 団交・争議 労働協約の締結及び労働条件改善の団体交渉は原則として組合員全員をもって行うものとする。組合が必要と認めた場合、執行委員会の議決を経て上部団体及びその他に交渉を委任することができる。但し、妥結は事前に執行委員会の承認を得るものとする。  
同盟罷業（ストライキ）は大会において過半数の議決を必要とする。その他の争議は執行委員会の決定による。
- 九 組合費 本組合の組合費は月収の百分の一とする。組合費の徴収は賃金支払い日に行う。
- 一〇 会計報告 執行委員会は大会に会計報告を提出し、会計監査の報告と併せて審議を求めなければならぬ。
- 一一 規約改正 本規約の改正は組合大会において三分の二以上の議決をもって行うものとする。

この日から連日、埼委労の誰かが必ず病院を訪問した。生まれて初めての組合づくりである。アンケート調査一つとっても、くどいほど説明しないと書き方の分らない人もある。字のまったく書けない人も二、三いた。いずれも大正生まれで、小さいときから辛酸をなめつくした人たちである。孫のようなヒロキが一番熱心に病院へ通い、おじいさんやおばあさんたちの話相手となり、アンケートの聞き書きもして、ようやく全員から回答を貰うことができた。

この間、青木と千葉は埼委労本部に通い、書記局会議で経過を報告して正式の支援決定を要請し、結成大会には森田委員長が出席することになった。青木は東一分会長（当時）の飯島や主だった組合員に、片っ端から電話して大会への出席を要請した。

四月三日、阿藤とヒロキが病院を訪ね、山本、水上と共に守衛と電話交換手に組合への参加を呼びかけた。

越谷市立病院の守衛は七名。それも当初の八名が七九年から一名減らされている。このため、二人制で二四時間の宿直業務を終えると三名の日直者と交代して夜勤明けとなる。病院の宿直は仮眠時間などあつてないようなものである。夜中に救急患者が担ぎ込まれると救急車の管理や問い合わせの電話の応答などで、仮眠中の者もとても寝てはいられない。ぐったりして疲れて帰って、一夜明けると朝から日勤である。次の日は再び二四時間の宿直。その次は朝から夜十二時半までの看護宿舍の夜勤があり、次の日がようやく公休となる。実質、週二〇時間以上の超過勤務



が強制される。日曜・祭日はおろか、交代要員がいらないから余程の重病でない限り、無理をして働かざるをえない。そのくせ賃金は基本給七九、五〇〇円、職務手当二七、〇〇〇円、皆勤手当がついて合計一二、五〇〇円（手取り一〇五、〇〇〇円）にしかない。

埼玉労働警備の給与が当時一律一四六、〇〇〇円。日曜・祭日なし、有給休暇もほとんどとれないが、仮眠時間が一日六時間で、実働週四八時間制なのに対して、雲泥の相違があった。（ちなみに、三交代制をとる小金井市の学校警備員の場合は、仮眠含む拘束週四四時間、日曜・祭日手当、有給完全消化、病欠代行の保障、代行手当など、まさに労働基準法一〇〇パーセント実施が勝ちとられている。基本給は年功賃金制で高齢者、勤続年数の長い者ほど高くなっているが、平均給与は三九歳で二三万四千円（残業別）である。また、町田市の六〇歳すぎの学校警備員の年収は五〇〇万円にもなるという）

そこまできなくても、労働組合のある自治体やビル管理企業で、これほど劣悪な労働条件はまずありえない。それを肌身で体験してきた埼玉労の阿藤やヒロキに対して市立病院の守衛は、「俺たちのことは放っておいてくれ」と言い放ったのである。

自治体職員には較べるべくもないが、民間の警備会社に較べても労働条件は著しく悪い。現実的に、労働組合の力で会社倒産を契機に大幅な時間短縮をかちとった埼玉労の阿藤やヒロキを前にして、守衛たちは驚くべき反応を示した。

「わしらは病院の治安を預かる病院警察だから、労働組合には入れない」

「俺は金なんかどうでも良いんだ。ブラブラしてると世間態が悪いから来てるだけよ」

「話がついてから入れと言われても、清掃の人らが作った組合にわしらは入れないよ」

低賃金と苛酷な労働条件に耐えて自分たちが今まで働いてきた事に対して、奇妙な職業上のプライドや清掃に対する差別感を露わに語る人もあった。

もち論、当時七人いた守衛のすべてがこのような人々ばかりではなかった。組合に理解を示す者や、蔭ながら励ましてくれる人もいた。だが、「今さらこんな年になって、組合なんかできないよ」という、隠居的な気分が支配的であった。厚生年金を貰っている人々にとっては、少しくらい賃金が上がっても、年金から差引かれるだけであつたからだ。

「埼玉労だつて、農家や年金暮しの人が組合に入ったのは、一昨年の会社倒産からだよ。組合に入らないと給料が貰えなくなるってんで、大部分の人が組合に入ったんだ。病院の守衛さんもそういう目に会わなければ分らないんじゃないか。じっくりつき合っていけば分つて貰えるよ」

阿藤は守衛たちの頑固さにあきれて不服そうな顔をしているヒロキをなくさめた。

だが、電話交換手たちの反応はまったく逆であつた。水上に連れられて山本やヒロキは七階の電話交換室を訪れ、四人の交換手に組合への参加を呼びかけた。話を聞いていた彼女たちの顔

は、見る見る明るいものになつていった。

「山本さんたちが応援してくれるなら大丈夫よね。そんな話を下でしているとは知らなかったけど、組合をつくるのは大賛成だわ」と、明るい顔で地元出身の電話交換手の馬場千鶴子が、一も二もなく賛成した。「組合があれば、会社や管理課にも言いたいこと言えるもんね」

「私なんか市立病院勤務ということで職安から紹介されたので、てっきり病院の職員と想像してたよ」と、一番最初に入社した斉藤美智子も憤慨したように言った。斉藤の話では、病院に電話をしたところ越谷の駅前に来てくれていうので、応募者が駅前に集まったところで、会社の車が迎えに来た。面接は病院の会議室で行われたので、市の面接だとばかり思っていた。だが、迎えに来た会社の人間もおり、賃金もあまりにひどいから不思議に思っていたが、実際に働くようになって初めて市の職員でないと分ってびっくりしたという。

「うちも職員協議会ができてから、労働条件も随分よくなったもんね。市職が応援してくれるなら良いんじゃない」と、市の現業職員を夫に持つ鈴木敬子も賛成した。

馬場や鈴木は市の職員でないことは知っていた。だが、市立病院の電話交換という重要な仕事をやる割には、余りの賃金のひどさにびっくりしたという。だが、鈴木には小さな子供がおり、馬場も結婚したばかりで、都心まで電車で通いきれなかった。給料がいくら安かろうと、越谷周辺には電話交換の仕事はまずなかったから、この四年間、嫌々勤めてきたのである。

彼女たちは、高齢の清掃員たちとちがって、組合のある大きな会社に勤めていた者もあり、それなりに職業意識と権利意識をもっていた。だから、待遇の不満や仕事上の不満について、事あるごとに管理課の厚見課長や浜野係長に改善を要求してきた。

だが、交換機の改善など病院側の施設・機器については彼女たちの要求を取り入れてきた管理課も、「労働条件については会社の問題であり、病院では立ち入れない」と、逃げ続けてきた。会社の人間と話をしようにも、毎月給料をもってくる東部営業所の吉田らは何の権限も持っていない。熊谷の社は遠く、日曜も交代で勤務をしなければならない彼女たちが、個人的に交渉できざるはずもなかった。

「もうこの五年間腹の立つことばかりで、どうしようもないと諦めてたんだよね」と、馬場が思い出してもくやしいという表情で語った。彼女たちの労働時間は、平日の早出が朝八時半から五時、遅出が十時半から六時の二交代制である。土曜は午前中二人、午後は一人勤務。日曜・祭日は一人勤務で、基本給七五、五〇〇円、技術手当一三、一〇〇円、皆勤手当五、〇〇〇円合計九三、六〇〇円であった。越谷市役所の電話交換手には及びもつかないが、民間の電話交換手の平均賃金が同年齢層で約十二万五千元（五四年度人事院調べ）であったのにくらべても著しく低い。

それだけに、彼女たちは組合をつくらうという呼びかけに全員が即座に同意した。職場委員は特別におかず、全員が交代してやれることは何でもするという意気込みであった。

守衛や交換手の実状も分って、要求書づくりが始まった。全員からとった生活調査と要求アンケートに基づいて、何度も話合って要求案をまとめた。

「基本給は十二万円以上という人が半分以上だ。十万円が良いという人も二人いる。公務員並みということでは、余りにも低すぎるんじゃないですかと」、ヒロキが感想を述べた。

「今すぐ公務員化なんて言っても無理だから、せめて十二万円は欲しいという訳よね。それだけの働きはしてるんだもの」

「交換手で私らしくらいの経歴なら、どこへ行っても最低で十三万円だよ。四人ともこれだけは絶対要求したいんだよね」

「償与については、冬三ヶ月、夏二・五ヶ月で清掃の人は足並みが揃っているが、交換さんは皆まぢまぢですね」

「市職なみというなら年間五ヶ月が希望だけど、実際には無理でしょう。せめて三ヶ月というのが最低ね」

基本給、償与の大幅アップ以外に要求が多かったのは、「家族手当」「住宅手当」「退職金」などを、何とか貰いたいという意見が多かった。

「有給休暇なんて、法律で決まっているのだから、休むのが当り前でしょう。でも、生理休暇は有給にならない所も多いから難しいかもね……」

「給料より人手を増やして貰わねば、仕事もきれいに出来ないし、休みたくても休めんで、何とかして貰いたいんだけど」と、水上が人員増の要求について説明した。

五〇年度定員は清掃二〇名であったものが当時は十七名しかおらず、交換手も当初五名いたのが五三年から四名に削減されていた。

「少なくとも日曜・祭日に少しでも休めること、出勤した場合は振り替え休みがとれるよう代替要員がほしい。いまの公休は、月三回となっているけど、これを週休制にしてほしい」

「週休制や有給休暇などについては、法律違反ですから是正できるでしょう。しかし、基本給や償与について、『世間並み』という気持は分りましたが、相当大幅な委託料の引き上げがないと難しい。要求がかちとれるまでストライキをやりぬくくらいでないと、簡単にはあげてもらえませんよ」と、安原がみんなのやる気を推しはかるように言った。

「ストなんておっかないね」

「そこまでやらなくても、上げてもらえないかね」

「市の職員とはちがうから、やはり無理かね」

口々に弱気な意見が出てくる。要求の書き方が一律であることから見て、誰かが強気な要求を出したのに引きずられて、「できれば」という希望を書いたにすぎないような印象であった。

「本当のところはどれだけ欲しいのですか。どれだけ貰わなければ生活できないんですか」と、

安原が重ねて聞いた。

この結果、最低の要求としてできてきたのは「日曜出勤しなくて手取り八万円。償与は年二ヶ月以上」というものであった。何ともささやかな要求ではあったが、手取り六、七万円くらいしか貰えない皆にとっては、大幅な要求であったともいえる。それにしても手取り八万円ということになれば、非課税限度額の「七〇万円の壁」は大幅に超えるから、額面で十万円（年収一四〇万円）近く獲得しなければならぬ。女子の平均年収が七三万円であったから、「倍増」に近い要求である。

「いいですか。今までがあまりにひどいから、手取り八万円というささやかな要求でも、額面では倍近いアップになるんですよ。相当に腹をくくってやらないととれない。組合さえできれば自然に上がるものではないんですよ」と、安原が説明すると、みんな「ほーっ」というようなため息をついた。

「手取り八万円なんて最低の最低なんだから。遠慮することないよ。市職だって年中ストライキやってるんだから、私たちがやればいいんだよ」という元気な意見が、交換手や若手のおばさん達の間から出てきた。

「病院当局に対しては過去の低条件是正、公務員並みということで高い要求を出していきましょう。今年度については、もう委託料が内定しているから大幅なアップは無理だ。会社に対して、

法違反や過去の慰謝料請求をしていけばいいんじゃないか。いずれにせよ、組合をつくってから、じっくりやっていけばいいでしょう」

山本や安原は組合員のギリギリの要求を聞いて、「それくらいなら何とかなる」と樂觀したが、空手形を切るわけにはいかない。「とにかく頑張ろう」と確認して、皆で手分けしていいよ明日に迫った結成大会の準備に取りかかった。

その夜、自宅で明日のあいさつを書こうと鉛筆をいじっていた水上は、「あっそうだ。明日は味覚糖に行けないんだっけ」と気付いて、慌てて吉田管理課長の自宅へ電話した。

「味覚糖はいいお得意さんだし、もうずっと前から明日は決まってるんだから、行って貰わないと困るよ」

「明日は組合の大会があるんです。いつもいつも会社の言うことばかりも聞いてられませんよ」

「それじゃ交通費とは別に二〇〇円余計につけるから、何とか行って貰えんかね」、吉田はしつこく言った。

「そんなこと言っても、組合の人の話じゃ病院の人間がよそへ働きに行くことは二重契約になるちゅうがね。ワシらも罪になるようなことはもうこれからできませんで」と、水上は一気にまくしたてた。電話の向うではっと息を飲むような静けさが広がり、電話はぶつりと切れた。



会社の人間に思いつきり言ってやった。せいせいした思いで水上は急に元気が沸いてきて、明日のあいさつの文章を勢よく書きだした。

それっきり水上はこのことを忘れてしまった。だが、これによって組合の結成を前日に知り、しかも、水上の予期せぬ強い拒絶にあつて、下手すれば刑事犯に問われかねないような「二重契約」まで追求された会社にとって、単に組合がつくられたというだけでなく、うろろうしているともっと大きな責任を追求されかねないという事態が明らかとなった。今から考えると、会社はこの時点で、八〇年度の「随意契約」を一方的に辞退し、あわてふためいて市立病院から撤退することを決めたのではないかと考えられるのである。

## 5 組合結成大会

四月四日(金)、快晴の越谷に春の陽射しが一杯に溢れていた。昨日までのもやもやした気分がいっぺんに吹きとぶようすがすがしい気持をもって、八時の始業前に皆が集まってきた。若いかあちゃんたちは、めったにしない化粧をして気持の張りを表わしている。

全員揃って、病院の表玄関と職員用の裏玄関に分れて、「組合結成のお知らせ」を職員や早々とやって来る外来患者に手渡した。生まれて初めてのビラまきである。ばあちゃんたちの手は緊張でふるえていた。すでに市職を通じて話がいっているのであろう、顔馴染みの看護婦や職員が、「がんばってね」と声をかけてくれる。

渡辺たちは山本と共に、病棟の看護婦控室にビラを持っていき、「組合をつくることになりました。今日の午後から結成大会をやりまますのでよろしく」と、あいさつをしてまわった。

### 東京ワックス労働組合 結成宣言

私たちは越谷市立病院で清掃や庁舎管理などの市の委託事業をうけおっている働東京ワックスの従業員です。

私たちは病院開設以来、人の嫌がる仕事を黙々としてやってきました。だが、私たちの賃金は、日給で二千六百元、日曜・祭日休みなく働いても手取り七万円にしかならず、家庭の事情で休みが多いと、即座に首を切られるなど劣悪な労働条件のもとで働いてきました。

会社は一人当り十数万円の委託料、「高齢者雇用開発給付金」をうけとりながら、法外なピンハネを行い、埼玉県一円で六百人もの委託労働者を抱えて、違法な労働者供給事業（人夫出し）を続けています。

私たちは、戦前・戦後を通じて社会の下積みとして、学もなく、うまく世渡りする術も知らず、ただ一生けん命働くだけの「物言わぬ民」でありました。会社はこんな私たちを食い物にして、悪どいピンハネを続け、自治体もまたこんな現状を知りながら委託事業を安くあげるため、悪徳業者をのさばらせてきました。

私たちが越谷の自治体労働者や委託労働者の仲間たちとの話し合いの中から、このような不法な状態をあらためて知りました。今、会社や市当局に対して「私たちを人間らしく扱え」〃労働者としての正当な権利を保障せよ〃と要求するのはあまりにも当然のことではないでしょうか。

私たちは、自分たちの労働条件の大幅な改善を要求すると共に、全国の自治体労働者や委託労働者にかけている「合理化・人減らし」の反動の大波に対しても、微力ながら闘っていかねばならないと考えています。

一、私たちは、これ以上、我慢の仕様もないところまで私たちを追いつめてきた会社・市当局に対して、委託差別撤廃、委託制度撤廃、労働条件の大幅改善を強く求める。

二、予想される会社の不当労働行為に対しては仲間との団結を固めて、断固としてはね返していくことを表明する。

よって、すべての委託労働者の解放を求める東京ワックス労働組合の結成をここに宣言する。

一九八〇年四月四日

(越谷市立病院) 東京ワックス労働組合

入院患者や外来患者から、はげまされた者もいた。「あんたらいつもよく働いているから、病院の職員だと思っていたのに、こんなにひどい目にあつてたんだね」と、腕章をつけて頭を下げながらビラを配っている組合員に話しかけた患者もいた。

八時半にビラ配りを終えると、清掃員らは各階に散らばり、腕章をつけたまま力一杯モップを握りしめて掃除を始めた。

結成大会は午後零時から病院の組合事務所で開催された。時間前に続々と支援者や来賓が詰めかけてきた。越谷市職は佐々木委員長以下三役、病院代表、病院臨職ら八名、埼委労からは森田委員長、川口業務代表Kさん、飯島東一分会長ら十四名、市職の顧問弁護士をしている地元の青年弁護士井上豊治の姿も見えた。

十二時になると清掃員や電話交換手たちが登場した。どの顔も緊張している。支援や来賓から大きな拍手が沸きおこった。

結成大会の準備委員を代表して、水上は用意してきたメモを読みあげた。長年にわたる苦しみが具体的につらねられ、切々たる思いが参加者に伝わっていった。「私ら何も知りませんが、組合ができた以上、一生けん命やるつもりです」と、水上はしめくくった。

来賓あいさつはできるだけ肩がこらないように、また一時までの時間の制約もあって、弁当を

食べながら聞くことにした。できたばかりの組合で金はない。市職と埼玉労からよせられたカンパをあてにして、青木が友人の自然食弁当屋に特別にまけてもらった心のこもった弁当であった。今でも「あの時の弁当のおいしかったこと」を忘れられない組合員がいる。

越谷市職の佐々木委員長からは、全国の自治体でも例の少ない委託労組の結成を我がこととして喜び、未長く支援していくという頼もしいあいさつがあった。

埼玉労の森田委員長からは、県警備、川口業務約四〇〇の組合員を代表して、同じ委託労組として奮闘を期待するというあいさつが述べられた。森田はの中で「県の合理化、無人化攻撃に埼玉労は実力で対抗する。共に委託差別撤廃のために闘おう」と、力強く東京ワックス労組を激励した。

山本からは、すでに埼玉労、市職が力を合わせて東京ワックス労組を支援するため、「悪徳ピンハネ業者追放！ 越谷市立病院の直営化を求める共闘会議」の結成が報告された。そして、東京ワックス労組特別執行委員に佐々木委員長、山本、埼玉労の青木、阿藤、安原が参加することが紹介された。

次いで、組合づくりの相談に乗ってくれた井上弁護士が立ち上がった。

「私は委託の小母ちゃんたちの苦労に身をつまされた。何の経験もない人が、勇気をふるって組合を結成したことに感動した。このような運動を広げて、働く者の住みよい社会をつくろう。そ

のために法律家としてできるだけの応援をやっていきたい」と、述べて、組合員の感激の拍手を浴びた。

議事は規約採択、役員選出、対会社・市への要求書採択と続いて、新役員の決意表明となった。六名の執行委員は準備委員がそのまま選出された。委員長は水上、書記長には馬場を代表として四名の交換手全員があたることになった。清掃からは秋谷、笠原、渡辺の三名の若手小母さんと栗原が選ばれ、それぞれ大きな声で、「がんばります」と決意表明した。

最後に、この日覚えたばかりの「がんばろう」の歌をみんなで合唱し、森田委員長の音頭で「団結ガンバロウ」を三唱して、東京ワックス労組は無事結成大会を終了した。

組合員がそれぞれの現場に向かった後、執行委員と支援者たちが残った。これから病院当局へ要求書を提出しようというのであった。

選ばれたばかりの執行委員を先頭に、病院事務局に押しかける。市立病院事務局長の山崎満洲男と管理課長の厚見英夫が柔らかな表情で迎えた。

「事務局長さん、私らは今日組合を結成しました。今まで言いたいこともいえず辛抱して働いてきましたが、これからは委託を差別しないで、人並みに扱ってもらいたいと思って要求書をもってきました」と緊張して水上は切り出した。今まで五年間病院で働いてきたとはいえ、病院の事

務局長と相對して喋るのはこれが初めてである。他の執行委員たちも同じなのか、直立してかしまっている。団交なれした支援者たちが周りをとり囲んで、組合の威勢を暗に示しているのと對称的であった。

青木が要求書を読みあげ、水上がうやうやしく山崎に要求書を手渡した。山崎はざっと眼を通して柔らかな表情で、「皆さんの状況はよく聞いています。今ここで具体的にご返事はできませんが、管理課にも待遇改善できるよう指示していますから、早急に回答したいと思います」と、誠意にあふれた返事をした。山崎は温厚かつ誠実な人柄で、理事者、市職の双方から信頼されていた人物で、この四月一日に、市の人事課長から病院事務局長に就任したばかりである。

「山崎さんは事務局長になったばかりだから分らないでしょうが、東京ワックスの劣悪な労働条件は、厚見さんが業者に委託料を抑えこんできた結果として起ったものだ。病院当局だって、その責任は免れませんよ」と、山本が鋭く言い放った。傍らに控えて神妙な顔をしていた厚見課長の表情が剣しくなった。

「オラ方が最低賃金や労基法を守らせなかったというのけ。とんでもない言いがかりだ。オラ方は毎年の契約でも、ちゃんと基準法に触れないように待遇しろって指導してるんだよ。それが守れないのは業者の問題じゃないか」

「何言ってるんだ。いくら指導したって業者がピンハネして法違反している以上、それを見過ご

してきたのは管理課じゃないか」と、山本が猛烈に反発した。他の支援者たちも、厚見課長の開き直りを追求して、事務所の中は騒然とした。

この時、後にいた組合員が、東京ワックス営業部の吉田が入口から顔をのぞかせてこちらを伺っているのに気づいた。清掃員たちが吉田にも申し入れようと動き出したが、吉田は慌てて逃げるように出て行ってしまった。「吉田さんは何した来たんだらう」と渡辺はいぶかった。

「いいですか。今日はどちらに責任あるか追求に来たんじゃない。現実に法違反を含む劣悪な労働条件がある。これが大幅に改善されない限り、組合としてはこれ以上正常な業務を続けることに耐えられない。そういう重大な決意をもって要求書を提出するんだから、責任逃れするより前向きに検討してもらいたいということですよ」と、安原が大声で山崎事務局長にダメ押しした。

「分りました。よく検討させていただきます」と山崎は、まだ物言いたそうな厚見を制して答えた。「お願いします」と、例の元氣一杯の声を張りあげて清掃員たちが山崎に頭を下げた。

事務所を出たあとで、山本が「もっと管理課を叩いておかないとすぐ責任逃れするんだから、奴らは」と不満気に言ったが、「まあ、当局の責任追求はいつでもできる。今日はみんなが直接局長に申し入れたということで良いのじゃないか」と佐々木がなだめた。

大会の後片づけをしてから、青木らは市庁舎に向かい、大会報告ビラを印刷した。「もう春だね」とヒロキが、春のおぼろ月がぼんやりした光を投げかけている市庁前の広場を歩きながら言



う。見ると、桜の木の枝のつぼみが大きくふくらんで、今にも咲きだしそうだ。

「のんびりしていいですね。阿藤や藤本さんは仕事に行ってるけど、我々だけで一寸一杯やりましょう」と青木が言いだし、三人は春酔の一刻をすごしたのである。

だがこの時、大変な事態が進行しているとは三人とも夢にも考えなかった。渡辺や笠原らも、忙しかった一日を終え、夕飯の仕度をしながら、「父ちゃんに組合やることになったと言ったら、何と言われるかね」と、のんびり思案していたという。

役員といっても名ばかりで、市職の人や青木らがやってくれるから、自分たちは大してすることはないだろうと、タカをくくっていたのである。だが、この一夜を境に、彼女らの運命は急展開していくのである。

第二章  
春雷の日々



## 1 逃げ出した東京ワックス

春一番が関東平野を襲う。荒川、利根川沿いに吹いて来る季節風は春耕の過ぎた田畑の赤土を一杯含んで空は赤く染まってしまふほどだ。東京湾から吹き寄せるこの猛烈な春風は、越谷、草加の街や村を襲って一日中吹き荒れることも珍しくない。細かな赤茶けた砂塵が容赦なく部屋の中に侵入してくる。このため川越あたりの農家では座敷に渋紙を敷いておき、客が来るとこれを取り除いて客に座らせたという。

この日、前日の組合結成の時の隠やかさとうって変り、空はどんより曇り、時折砂塵を巻き上げた突風が吹いていた。

笠原と渡辺は風に自転車を押し戻され、うす眼をあけて砂塵を防ぎながら必死に自転車をこいでいた。いつものように昼休みに病院の近くにある自宅に戻って昼食をとるためである。この日は土曜だったから、間もなく学校から帰ってくる子供たちの昼食も作ってやらねばならぬ。それにこの風だから出かけに干した洗濯物も取り込んでおかねばならない。この砂ぼこりでは、もう

すっかり赤く染まってしまつて手遅れになつたかも知れない。いまましい風だと思ひながら、  
氣ばかりせていて自宅に着くやいなや台所に駆け込んだ。

子供たちの昼食の仕度をして、渡辺が慌しく食事を済ませてほつと一息ついたところへ上の女の子が学校から帰つてきた。

「お母さん、何が葉書が来ているよ。不在通知」って何だらうね」

速達、内容証明の所にそれぞれ丸印のついている葉書が一通。「何だらうね。内容証明って何のことかね」

渡辺母娘が首をかしげているところへ、近所に住む笠原が慌ててやつて来た。

「東京ワックスから手紙が来ただらう」

「いや、うちは留守してたから、何か不在通知って葉書が入ってたけど」

笠原が持つて来た内容証明の封を開いて、柀目の便箋に書かれた大きな文字を見た瞬間、二人は血が逆流するようなショックをうけた。「解雇通知」という文字が目飛び込んで来たからである。

「解雇通知って、私らを首にすることだらうか」と、渡辺は大きな眼を見開いて信じられないというように叫んだ。

「私らだけじゃないよこれは、ひょつとしたら皆に来ているかも知れん。病院に電話してみよ

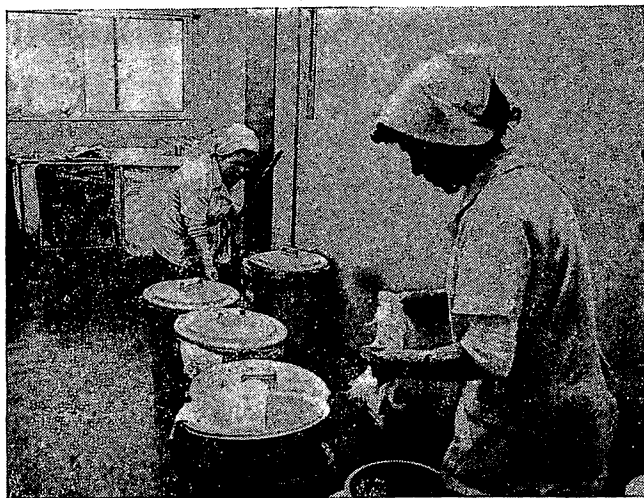
う」と笠原がもどかし気にダイヤルを回した。

清掃控室には折よく青木と安原が今後の会社交渉の打ち合わせをしようとして来た所だった。笠原から電話を聞いた二人は一瞬「あっ」と思った。いずれこじれてくれば、会社が何らかの形で逃亡するかも知れないとは思っていたが、「即日解雇」とは余りに手まわしがよいので驚いたのである。

「分りました。恐らく皆のところにも来てると思います。すぐ確認しますから、二人ともそれを持ってこっちへ来て下さい」

青木は笠原からの電話をおくと「水上さん、今の時間に家に誰かいる人に連絡をとってもらって下さい。きっとほかの人のところにも来てるにちがいないから」と言う。

果せるかな、水上を初め、市内の数件の家に



仕事をしている間に解雇通知が自宅に

東京ワックスからの内容証明が来ていた。中には老人しかいないので持って帰ってもらった家もあった。市内の者には午前中の段階で来た家はないが、それも時間の問題だ。

一わたり確認が済んだ頃に、笠原と渡辺が息をはずませて駆けこんできた。急を聞いて、病院の山本や加藤、それに交代で休憩中の交換手たちもやってきた。

安原が大声で内容証明を読みあげると、全員に絶望的な驚きの表情が広がった。組合を作ったとたんに解雇通知を受けたのだから当然ではある。それも安原や山本から「絶対心配ない」といわれてきただけに、みんなの驚きと失望感は大きかった。

だが、青木や安原は違った。「なめたマネをして」という怒りはあったが、「これでこっちの勝ちだ」という思いで急にいきいきとし始めた。

「何も心配することはありません。理由もなくこれだけの年配者を全員解雇できるわけもない。市との契約責任だってある。全員解雇して仕事はどうするんですか。こんな通知なんかで首が切れるわけがない。むしろ不当解雇で訴えれば慰謝料やなんかでお金がとれるくらいです」と、安原が確信をもって皆に説明した。

「私らの場合も、会社が突然倒産して、身分が宙に浮いたが結局は別の会社をもってきて尻ぬぐいした。未払いになっていた給料も『賃金確保法』という法律があって、結局は払われることになっています。会社がなくなるといふことはむしろ直営化の絶好のチャンスともいえるの

です。皆さんも昨日ごろんになったように、この闘争は六〇歳、七〇歳といった年配者たちが先頭に立って勝利してきたんですよ」と青木は、東京クリナー倒産時の模様を詳しく話した。

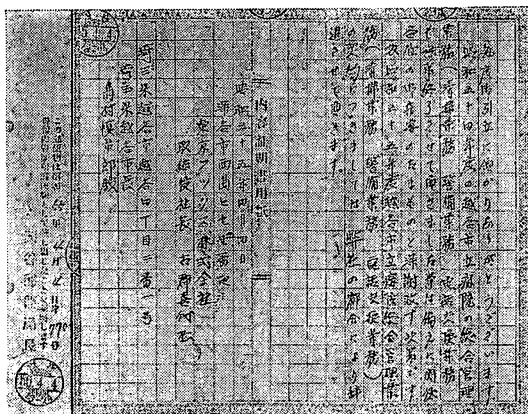
山本も、「皆さんの生活はどんなことがあっても守ります。万一給料が払われなければ、組合でたてかえてでも、皆さんが困らないようにしますから安心して下さい」と勇気づけた。

そこへ市職の佐々木委員長らが駆けつけて、さらに一同を励ました。

「どちらにしても病院当局を追求して、雇用と身分の確保を約束させる必要がある。今から直ちに事務局長団交をやろう」と佐々木が提案した。連絡をとると厚見課長が「こっちも困ったことになっている。すぐ来てくれ」という返事であった。

「実は今朝になってこんなものを東京ワックスの専務と吉田が持って来たんだ」と厚見は苦虫をかみつぶしたような表情で、一通の内容証明を投げてよこした。

「何だよこれは、理由も何も書いてないじゃないか。こ



契約辞退届

んなものを当局は認めるのか」と山本が早速噛みついた。

「認めるわけないだろう。ワックスには今年も随意契約でやってもらおうということで話がついてたんだ。その件で昨日は吉田に来てもらったんだが、おめえらの姿を見てびっくりして逃げ出したんだべ。とにかく、次の見通しがはつきりつくまで東京ワックスに責任もってやらせるしかねえだろう」

厚見の話では、東京ワックスの三浦専務は「ともかく辞退させて下さい」の一点張りで、理由も何も明らかにしないということであった。東京ワックスは労働組合の結成をそれ程までに恐れていたのである。

執行委員と共闘会議は、控室に戻って全員に報告した。とにかく東京ワックスが逃亡したことは、彼らの今までの違法な雇用責任を、自分で認めるようなものだ。過去のピンハネ、違反行為の責任をとらせるまで解雇については絶対対応しない。一方市に対してはこの機会に、このような雇用不安を招く委託制度をやめ、直営化するよう強く求めていく。このような基本方針を確認して、「とにかくこうなったら、将来の生活と身分を安定させるためとことん頑張ろう」と誓いあった。

多勢の支援者に励まされ、当面の生活は何とかなるだろうと思ったが、先の不安は大きい。日中吹き荒れた風はすでに止んで、おだやかな春の夕暮であったが、病院から出ていく小母ちゃん



たちの足取りは、想像もできない困難にぶつかって、いかにも重いものであった。

## 2 会社逃亡は直営化のチャンスだ！

四月六日、共闘会議の緊急対策会議が開かれた。越谷市職三役をはじめ病院役員ら、埼玉労（11当時）は千葉、青木、柳沢の執行委員と東一分会、西部地区の若手有志、埼玉労、埼玉教の地元組合員などが、日曜の午後には市職事務所が集まった。

ここで、埼玉労の会社倒産、隔日勤務闘争の成果と不十分性が報告され、「逃げる会社は追わない。この機会に一切の会社導入を拒否して直営化を勝ちとろう」という基本路線が改めて

第三給食センター民間委託反対

### 市労連 ストに突入

日 男  
中 女  
本 部

## 反対闘争を全面支援

理事者側との交渉は平行線

異例の現地本部を設置



吉小牧民報  
1978年3月13日

委託化を阻止した数少ない事例

確認された。

「自治労はいま全国で下請け合理化の大攻撃をうけている。七八年には北海道の苫小牧で学校給食委託化阻止に完全勝利したが、多くの自治体では現業部門や一部の事務がどんどん業務委託されて下請け業者が入って来ている。越谷でも島村市長は隙があれば現業部門の合理化をやらうとしている。市職としては委託合理化を許さないためにも、病院の委託業務を直営化させねばならない。全力を挙げて委託業者追放、直営化を勝ちとっていきたい」と、佐々木委員長は越谷市職としての闘争目標と決意を述べた。

この場で正式に、「悪徳ピンハネ業者追放！ 越谷市立病院委託事業の直営化を求める共闘会議」（以下、共闘会議）の正式な結成が行われた。埼玉県学校事務労働組合、埼玉教育労働組合なども、それぞれ組合機関に図ったうえで、五月中に正式参加することになった。共闘会議と東京ワックス労組はこの時点で「委託直営化」をはっきり要求することになったが、全国的には直営化された委託事業の例は東京小金井市の学校警備員など過去のごく少数の例を除いて、この当時にはほとんど例がなかった。

東京ワックス労組の要求アンケートでは、多くの労働者が「直営化してほしい」という要求を出している。だが、交換手や若い小母ちゃんたちを別にして、一般的な定年のメドとされる六十歳を超える者も多く、「直営化」は「職員並みの待遇」といった意味あいでも考えていた者が多か

った。「正職員化」を全員が勝ちとるのは無理だとしても、何らかの形で市当局に雇用と労働条件の責任をとらせることは小母ちゃんたちの生活と身分を保障させるためには、絶対に必要であった。会社倒産に際して多くの委託労組が「下請け労働者としての雇用継続」を自治体や新しい会社に求めるのが普通である。だが、東京ワックス労組と共闘会議はあえて「悪徳・ピンハネ業者追放」を掲げ、委託制度そのものを撤廃させようと決意したのであった。

もつともこの時点では、どのようにして直営化を勝ちとるかという方針や展望は明確ではなかった。このため、とりあえずは東京ワックス、病院当局の違法性や不当性を追求して、安易な下請け化政策等の責任を追求し、大衆的に直営化要求を浸透させていく。この過程で組合・共闘会議の力を強化し、新会社導入を阻止して「委託会社なき業務継続状態」（自主管理）を長期に続け、当局に雇用責任をとらせようということになった。今から考えれば、「紛争を恐れてどこの会社も引き受けないだろう」という甘い判断があった。さらに、自治体に道義的な雇用責任をとらせると言っても、島村市長がそのような道義や道理の通る立派な理事者でないことを知らなかった他方本願的な考えであったといえる。

この方針に基づいて、東京ワックス労組は、患者・職員に対して「会社逃亡を糾弾する」ビラを配布し、八日には市役所前で同じようなビラ配りを行った。

午後には全員で事務局長に会見し、「委託労働者の待遇改善に関する要望書」を正式に手渡す。

## 〈基本要 求〉

- 一、市当局は東京ワックス俵のピンハネ、違法行為の実態について調査し、無責任な事業放棄によって、労働者及び市に与えた損害について市の基本的姿勢を明らかにせよ。
- 二、このような不法行為、契約違反は委託制度が続く限り避けられないものである。市はこれを機会に越谷市立病院のすべての業務を直営化し、委託制度を導入しないこと。
- 三、病院設立に際して、市が業者委託を導入した経過と根拠、東京ワックス俵に落札した経過と内容を明らかにすること。
- 四、下記労働条件要求に基づいて、直営化した場合には直営化の方向の中で最大限実現させることを要求する。



病院ロビーで訴える東ワ労組員たち

この中で組合は市の行政責任を「本来、委託労働者とは、市が職員として現業部門で雇用すべき労働者である。市はこれまで職業安定法四四条違反の様態を黙認しつつ、公共機関の運営に欠くことの出来ない業務を雑業務として、最低賃金法違反の劣悪な労働条件を直接手をくださずとも強制し、不当な差別構造を支えてきた」と追求し、「満身の怒りと裂帛の気合を込めて要求書を提出する」と格調高く不退転の決意を込めて要求している。

△労働条件改善要求Vは賃金、人員、労働時間、退職金、過去の労働債権について計十二項目を要求している。組合の試算ではこれを満たすためには約一億二千万円が必要とされる。病院当局が東京ワックスに対して示した当初予算額が四、三〇〇万円であったから、市職員並みの労働条件にするためには予算を三倍増やさなければならぬことになる。△業務委託Vの美名でいかに労働者が劣悪な条件でコキ使われていたか明らかではないか。

この日、遅ればせながら東京ワックスに対して「労働組合結成通知」と四月十一日に団体交渉を行う旨の「団交要求書」を内容証明にて発送する。

その後、守衛たちと話合う。守衛も一時はどうなることかと思っていたが、管理課から「雇用は市が責任をもつから安心して働いてくれ」との連絡があつて、「事態を静観している」という。組合については「感覚的についていけない」「病院の中でピラ配りをするのはもつてのほかだ」という意見も出てきた。夜勤(二四時間)一日直の連続勤務で考える余裕も、仲間同士話合う機

会もないせいも、現状についての諦めが強いのだろう。「時間をかけて話してくしかないよ」というのが若き学校警備員たちの感想であった。「埼玉労の年配者たちと同じで、解雇や賃金不払いが具体的に出来ない限り動かないんじゃないか」

九日、再び病院玄関前で外来患者に対するビラ配り。待合室の正面の壁に模造紙三枚を連ねて、「経過と要求」を大書し、患者たちに大々的なアピールを行った。

この日の午後になって東京ワックス吉田課長が厚見管理課長に呼ばれて病院に現われた。組合員がこれを発見して、同社の雇用の実態について詳細な確認を行った結果、数々の違法行為が明らかになった。

吉田はこの中で、これらの違法行為の原因として、「競争入札は業者泣かせだと思えます」と訴えた。指名競争入札こそが不当なダンピングを招き、労働条件の悪化を導く根本原因であることを業者自身が深刻に自覚しているのである。

「正直いって、四千万ちょっとの委託料で三十名の従業員を抱えて、材料費を払っていくことは倒底できないことだ。だが、病院の管理課長から、これだけしか予算がない。いやなら競争入札して他の業者にやらせると言われたら、会社としては泣く泣く認めるしかないのです」と、吉田は厚見課長の前で組合員たちに証言したのである。

この段階では、委託制度の問題点と劣悪な労働条件の実体を病院内外に広く宣伝する必要がある

確 認 書 (抜粋)

- 一. 私は東京ワックスの越谷市立病院内の事業所の担当責任者です。
- 四. この事業所内の定員は仕様書により、病院から決められています。会社はそれに見合った従業員を確保し、病院に配置しています。
- 五. 就業規則は病院の事業所になかったことを知っていました。  
就業規則は病院の事業所に作らず、従業員の話し合いでやらせていました。就業規則提示義務を知りませんでした。
- 六. 労基法第15条に定める労働条件の明示について病院事業所で行っていませんでした。この事は労基法違反だと思っていませんでした。
- 七. 三六協定を知らずに、時間外休日の労働をさせていました。
- 八. 女子の労働時間及び休日に関して、法的規定があったにもかかわらず、働かせていました。それを知りませんでした。
- 九. 会社には忌引規定(有給)及び産休規定があるが、各事業所にはその事を伝えていない。そのため各事業所の従業員は休みがとれませんでした。
- 十一. 賃金の決定は専務か副社長が行います。
- 十二. 最賃法以下の従業員がいますが、専務でないとは是正は出来ません。
- 十三. 守衛の仮眠時間は23時から翌朝5時までだと思っています。  
仮眠時間は労働時間に含まれません。現状としては起こされるので改善される余地があると思います。
- 十四. 病院と3月下旬に見積りあわせをして、4月4日に部長と私で辞退を申しあげにきました。
- 十五. 東京ワックスには生理休暇規定はありません。
- 十六. 私は、東京ワックス従業員が、一週間につき一日の公休が与えられておらず、休まずに働かされている事を悪い事とは知りつつも現実には働いている事を知っていました。
- 十七. 会社では人手不足のため、各事業所から材料不足の連絡があっても、事業所まで運ぶ事が出来ず、従業員に材料を各人の賃金で買わせた事を知る由もありませんでした。
- 十八. 競争入札は業者泣かせだと思えます。

4月9日

管理部長 吉田武雄

った。入院患者ですら、清掃員が病院の職員だと感ちがいして「小母ちゃんたちは高い給料もら  
ってて良いねえ」と羨しがる人さえいた程である。当初は組合結成から要求交渉に至る過程でじ  
っくり、市職組合員や市民に実情を宣伝していけばよいと思っていた。だが、会社逃亡という緊  
急事態の中で、来たるべき対市交渉に備えて情報宣伝活動を強化しなければならなかった。

組合では会社逃亡の翌日から連日のピラ入れを行った。越谷駅からバスで通ってくる者たち  
が、交代で出勤を早めて市役所前でピラまきをした。ピラの受け取りも良く、激励の声をかけて  
くれる者も少なくなかった。みんな生まれて初めての者ばかりであったが、それだけに切実な訴  
えが市職組合員や市民の共感を生み出していった。

### 3 人を人とも思わね暴力市長

四月十日東京ワックス労組は初めての半日ストライキをうった。出勤時のピラまきだけでは市  
職組合員や一般管理職に対する情宣としては不十分だ。職場回りをして直接アピールしていこう  
という市職からの提案で、半日ばかりで本庁の職場回りと当局への交渉申入れをしようというこ



とになったのだ。

全員が八時前に市役所玄関に集まった。病院の近くや東部地区に住む組合員は自転車に乗ってかけつけた。夜警たちや市職の役員たちも来る。

ピラをまき始めて間もなく藤倉助役がやってきた。元教育長としてインテリらしき威厳を誇示するかのような重々しい足取りである。小母ちゃんたちがピラを手渡す。助役は渋い表情をしながらピラを受けとり、口々に窮状を訴える清掃員や交換手たちに「うんうん」とうなずいて話だけは聞いていた。

「さすが元教育長だね。話だけでも聞いてみるという余裕があるよ」と、藤本が感心したように言う。

「ポーズだけはね。あれで結構腹黒いところもあるんだよ。もっとも市長がでたらめで尻ぬぐいばかりしているせいかもね」と小野田。

八時半近くになって大半の職員が入庁した頃、一台の黒塗りの公用車が西口玄関に横付けになり、紺地に白の塙模様のスーツを着たやせぎすの中年の男が降り立った。

「おっ、市長がやって来たぞ」と市職の組合員が大声をあげて指さした。越谷市長島村慎市郎は落ちつきのないせかせかした足取りで、職員通用口に入ろうとした。

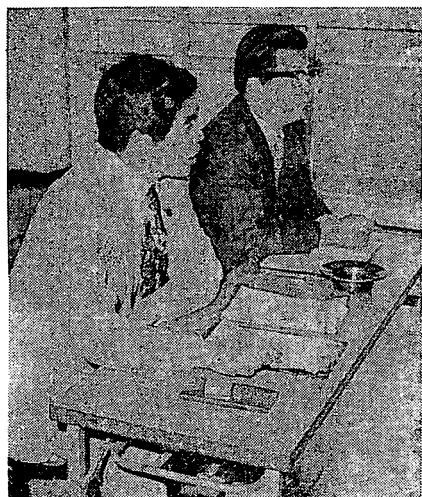
「市長さんお早うございます」と栗原が曲がった腰を一層折り曲げて市長にあいさつをした。栗

原は大袋町の住民で、市長の父で二代目越谷市長・島村平市郎とは大袋小学校の同級生であった。島村家のすぐ近くに住む栗原は同家に入りし、慎市郎が小さな頃からの馴染みであった。

島村は栗原を認めたが、あいさつを返すどころか、いきなり怒鳴るような大声で、

「何をしてるんだ。市職なんかにそそのかされて組合なんか作ってもろくな事にはならんぞ。首になっても市職は最後まで面倒見てはくれんぞ」と叱りつけた。

団交に出ても怒鳴るだけの島村  
市長（向うは山崎事務局長）



それは幼い頃からの近所馴染みの老人に言う言葉ではない。労働組合を真底憎んでいるヤクザのような感情的な言葉であった。あまりのことに栗原はオドオドして何も言えなくなってしまうた。

「市職がそそのかしたってどういう事だよ。委託会社を使ってひどい目にあわせてきたのは市の責任じゃないかよ」と小野田が市長に抗議した。

「委託のことは会社に任せてあるんだから市は関係ないんだ。そんなことも分らないのか、バ

「カヤローツ」と市長は真つ赤になつて怒鳴り、栗原や小母さんたちを睨みつけた。

「ひどい市長がいるもんだ。あれが人の上に立つ為政者の言うことかよ。江戸時代の悪徳代官そのものじゃないかよ」と藤本が、傲慢な足取りで通用口へ向かった市長に一声浴びせかけた。島村は口惜しそうに振り向いたが、言い返すこともできず庁舎の中へ入っていった。

「これで委託制度で皆を苦しめていたのは会社ではなく島村市長だということがはっきりした。この暴言、委託に対する思いやりのない差別的態度を市役所中にアピールして、市長の責任を追求しよう」と藤本が提案した。市長の人を人とも思わぬ振舞いにびっくりし、涙ぐんでいた老清掃員も、今や怒りがこみ上げてくるようにうなずいていた。

市職役員を先頭にして二手に分れて本庁舎内の各部局を訪ねる。業務を開始したばかりで、どの課も打ち合せや窓口の準備でざわめいている。市職の役員が睨むように会釈すると、管理職たちは黙って新聞を広げて知らんぷりをした。

市職や埼玉労の組合員が委託労働者の劣悪な労働条件と、その原因が安上り行政の名による差別的な委託制度にあることを説明した。東京ワックス労組の組合員ひとりひとりが、自分たちの窮状や市長の暴言を、口ごもりながら訴えた。人前で話をするのは初めての者ばかりであった。それだけに、必死の思いで語る一つ一つの言葉に切実な想いが溢れていたのであらう。どの職場でも手を止めて聞き入り、大きな拍手で激励してくれた職場もあった。

「あの市長ならそれくらいのこと言いかねんよ。なんせ越谷市は自分の会社くらいに思っているんだから」と建設部のある職員が吐いて捨てるように言った。彼の話では、島村は自分を支持してくれる農家や地元の商店主たちには極めて愛想がよく、市長室にもきげん良く招き入れるという。だが、市の職員たちに対しては自分の下男か何かのように命令口調でしか話さず、とくに組合に対しては本能的な憎悪を持っている、という。

市長に就任して以来島村は、市職との団交などでたびたび市職組合員に暴力を振ることがあった。つい最近も部課長会議に団交を要求し待機していた市職役員、組合員に対して、島村市長は最後に会議室から出てくるなり、いきなり扉付近にいた組合員にタバコの火を押しつけた、という事件が起こったばかりである。

団交の席で市職の役員と口論になり、「出ていけ」と大声を出して拡声機をふりあげ、投げつけようとしたこともある。市職ではこのような市長の暴力行為に関して刑事責任を追求して告訴しようという声もあった。だが、基本的には労使問題であり、「ただっ子」のような市長の言動をとらえて司直の手に渡すのは大人気ないという判断があつて見送つたという。

後に、深堀秘書課長が酒席の帰りに庁舎内の市職のピラをはがし、これに抗議した市職役員らを市長の命を受けて「傷害罪」をでっちあげて告訴し、佐々木委員長以下九名の役員を警察に逮捕させた。これに較べて、市職の判断は余りに「良識的」すぎたのかもしれない。

いさめる者も周りにいないまま傍若無人に怒声を上げ、事ごとに暴力をふるう二代目市長——まさに藤本が指摘した「悪代官」の如き男が二万都市越谷の市長であると信じられようか。だが、栗原を初め委託労働者のすべてが自分の目と耳で市長の冷酷さ、暴虐さを見聞きした。こんな男に自分たちの生活や身分の改善を訴えても聞き入れられるであらうか？ 暗澹とした絶望と怒りを皆が感じたのである。自分たちを虫けらのようにしか見ていない市長に対する怒りが、後の大闘争のエネルギーとなつていったといえよう。

今様悪代官Ⅱ越谷市長・島村慎市郎とはそも何者か。

昭和十一年生れ、四一歳で四代目越谷市長となつた島村慎市郎の父は二代目市長となつた島村平市郎である。島村の家は大袋にあり戦前からの自作農であつた。平市郎の子供時代には、数町歩の田畑を有し、小作人も使つていた。当時の越谷地方の小作代は四分六で、小作人は六割も搾取にあえていた。平市郎は小学校を卒業して春日部中学に進んだが、当時の同級生で進学したのはわずか二名。尋常小学校を卒業する者さえ学齢者の半分にも満たない時代であつた。平市郎は春日部中学を卒業すると農会（戦前の農協）の書記となり、米穀検査や供出米の事務を執つた。当時の農会の書記は単なる事務屋ではなく、農家の生産高を調査し、米穀の等級（従つて小作料）を査定するという大きな権限を持つていた。このため、農家は検査に手心をつけてもらうため、つけ届けをする習わしになつていた。平気でワイロを貰う習慣は、平市郎から慎市郎へ

伝えられた地主階層の家風ともいえるものであったことが窺える。

一九五七年越谷は市制を敷く。人口約四万八千。初代市長には大塚伴鹿町長が選ばれた。大塚は二期目再選、三期目は無投票で選ばれるなど、農村部の圧倒的な支持を得てきた。だが、大塚氏が引退を表明した七〇年には越谷の人口は十三万近くに膨れ上がり、都市化の急激な波は市民の多様化、多政党化を生んでいた。この様な多様化を反映して、この年の市長選挙には、各政党

間の足並みが乱れ、自由民主党から立候補した島村平市郎が勞せずして市長となった。

平市郎は温厚な人柄と長年の書記官勤めでつちかった如才なさで市民の評判は悪くなかった。しかし如何せん、急激に膨張を続ける新興都市の首長としての行政手腕に未熟さがあった。

### 何の金で建つ？ 島村御殿

とくに市の機構拡充とともに職員が年々増大し、当時の世相も反映して、「自治労」の活発な待遇改善要求を受け入ってきた。現在は市の幹部となっている当時の市職員との交渉の席上、平市郎は机の上を這いずり回るといふしゅう態さえ見せた程だという。慎市郎が「黒田革新市政の悪い遺産」と

して攻撃して来た「過剰人員、高給化」は高度成長期のベッドタウン的都市に共通したものである。

「俺はおやじのように組合の言いなりにはならないぞ」と親しい者に語ったという慎市郎の執念深い「組合敵視」は「無能市長」と評された父親に対する慎市郎の反発から出たもの、とも言える。

七三年、平市市長は東部清掃工場のプラスチック専焼炉問題に関する議会運営の不手際を追求され窮地に立った。折も折、草加の革新市長・黒沢春雄の葬儀を欠席し、民間ゴルフ場の開会式に出席したことで、越谷の革新勢力から攻撃され、自民党の中でも評判を落した平市郎は、孤立無縁のまま任期を一年間残して辞任した。

慎市郎は、父親の雪辱と、自身の政治的野望を果すべく、島村ファミリーの熱望をうけて、若冠三七歳で市長選に立候補した。慎市郎は大袋近在では「秀才」のほまれ高く、早稲田の理工学部で建築を学び、五八年東京都交通局で土木部門に携わり、「みのべ都政」下での革新官僚の中で肩身の狭い思いで宮仕えをしてきた。七一年には招かれて春日部市建設部都市計画課長補佐となり、区画整理課長を経て、七三年には土木課長として在職していた。

この七三年選挙は、七二年の埼玉知事選で革新統一候補の畑和氏が勝利したのをうけ、続々と革新首長が誕生するという「革新ブーム」の中で行われた。一月前に行われたばかりの草加市長

選で、鈴木繁が華やかに登場したばかりで、越谷市長選挙は七番目の革新首長誕生をめぐる、保守と革新が真っ向から対決して全国的にも注目された。島村慎市郎は、保守層のバックアップと「父の遺恨戦」という保守層好みの有利な条件にありながら、社会・共産・公明・民社四党の推す革新候補に九千票の大差で破れた。

この時、三八歳で市長となったのが、慎市郎の生涯のライバルと目される黒田重晴である。黒田は慎市郎の大袋小・中学校時代の同級生であり、慎市郎と同じ越谷高校の定時制を卒業した。慎市郎が土地の有力者の長男として何不自由なく育ったのに対して、小作農の家に生れた黒田は働きながら定時制を卒業して、同じ早稲田の第二文学部（夜間）を苦勞して六〇年に卒業した。年若い両親を養うため、黒田は労働組合もなく初任給も安い越谷市役所をあえて志願した。人口の急激な増大に伴って、市の機構も拡大しなければならなかったが、「町役場」的な給料体系では優秀な新卒者は得られない。六一年に黒田が中心になって職員組合をつくって自治労に加入し、活発な待遇改善闘争を始めた。この限りで、人材を集めたいとする理事者側の要望とも一致し、越谷市職員の労働条件は目ざましく向上した。黒田は六三年に県下最年少の市会議員となり、七〇年の市長選では若冠三五歳で社会党から立候補して落選した。そして七三年、怒濤のような革新ブームに乗って、ついに市長当選を果し、「金持ちのボンボン秀才」の慎市郎に大きな差をつけた。



春日部市の土木課長を辞めて市長選に立候補して同窓生に破れた慎市郎は、「父の無念」にも勝る屈辱を自分自身で味わわされた。慎市郎は叔父の営む「家具の島忠」の取締役として初めて「世間の水」を味わったが、市長への野望を忘れることができず、土屋義彦参議院議員の秘書として、自民党流の「ボス政治」「宴会政治」「葬祭政治」の修業を始めた。

かくして苦節四年の後、高度成長に乗って財政膨張を続けた黒田市政と対決。一見合理主義的な財政再建論と、農家・地主層をとり込む「田舎政治」の二本立てで、大方の予想を裏切って二千票の僅差でついに宿願の市長の座についたのである。

#### 4 秘書課長と助役の差別発言

職場回りを終ると、市長に要望書を手渡すため、再び連れ立って庁舎の二階東側にある市長室に向う。もち論、今朝ほどの暴言に対して断固として抗議をする積りで、階段を一步一步踏みしめて登った。庁舎の清掃をしている別の委託会社の清掃員が、はち巻きや腕章をつけた病院の小母さんたちを感じたように見送っていた。

市長室の前に受付があり、時ならぬ小母さん達の登場で秘書課員が慌てて立ち上がった。市長に面会を申し入れたが、市長室から出てきたのは深堀秘書課長（現・企画課長）であった。

「委託会社の従業員なんか市とは関係ないんだ。市長が会うわけないだろうが」と、これまた市長に似て威高丈なヤクザ口調であった。

「あなたに用はないだよ。あなたの役目は市長にちゃんと取り次ぐだけでいいんだ」と支援の者が言う。

「何だ貴様は、越谷の者じゃないだろう」と深堀が大声を上げて怒鳴った。これが市長の秘書だろうか。いかに政治的信条が違っても、訪問者に頭ごなしにけんかを売するような秘書が、どこの自治体にいるだろうか。市長自身が乱闘国会で暴れる自民党私設秘書の類いであったから、このような品性のない男を身近においておくのだろうか。深堀は秘書課長になった前後に、休みの日には島村の家にせっせと通って広大な庭の草むしりや車を洗ったりして島村に取り入っていたという話が、市役所の中でささやかれていた。深堀も小役人なら、このような大鼓持ちを登用する市長も前近代的な代官気取りといわれても仕方あるまい。

「何だ、こんな所まで来たのか。ここはお前らが来るところじゃない」と怒鳴りながら島村市長が出て来た。「委託のことは会社に任せてあるんだから、俺は関係ないんだ」

「その会社が逃げだしたから、みんな心配して来ているんだろうが」と、小野田が市長の前へ出



患者でこった返す越谷市立病院

ていった。

「またおめえか。小野田、おめえに用があるから中へ入れよ」と、島村が拳を突き出して小野田を呼んだ。

「おら一人じゃだめだ。皆、中へ入れてくれるなら入るべ」と小野田。

「お前一人でいいんだ。いいか、これは市長命令だぞ、小野田、中へ入れ、バカヤローッ」と島

村がムキになって言う。

「嫌なこった。こんど皆で入ってやるからな」

と小野田が言い返した。

「どうしたんかね」と、騒ぎを聞きつけて藤倉

が助役室から顔を出した。

「どうもこうも、市長に面会を申入れたのに、

バカヤローとか怒鳴るだけで、ひどいじゃない

ですか」と専従役員の小野田が藤倉に説明し

た。「おめえらに会ってる暇はねえよ」と島村

はダダッ子のように言い放つと中へ入ってし

まった。深堀も続いて市長室に入り、ボタンと

大きな音をたてて扉を閉め、カギをかけてしまった。

「こんなことでいいのか、助役さん。市長の代りに皆の話聞いて下さいよ」と市職書記長の正木が改めて助役に会見を申入れ、藤倉は少しならと応じた。

助役室の大きなソファに、助役と市職員・東京ワックス労組役員が座り、話が始まった。座り切れない組合員はじゅうたんの上に座り込んだ。「こっちの方がふかふかして座り心地よいよ」と小声でばあちゃんが笑う。こんな立派な部屋へは皆初めて入った者ばかりで、固くなっていた雰囲気緩和が和んだ。

「助役さん。私らお国のために兵隊にも行ってきました。皆、一生けん命働いてきました。ただ、東京ワックスはあんまり給料が低い。何とかしてほしいと思って労働組合を作ったら会社が逃げ出したです。これじゃあんまりじゃありませんか。何とか市の方で私らを雇ってもらえませんか」と水上が、必死になって訴えた。藤倉助役は目をつぶって耳を傾けていた。

「いいですか、藤倉さん。市長が委託は関係ないと言いつ張っても駄目だ。競争入札で業者間のダンピングをおおるから業者は労働条件を切下げ、労働三法や最賃法を守ることができなくなる。

委託制度をとる限り必ず法違反や劣悪な労働条件が生れる。今の委託料ではまともに労働基準法すら守れないから、会社は契約を破棄して逃げだすんじゃないか。これが、市の責任でなくて何なんですか」と正木が鋭く助役を追求した。

「県だって、労基署から元請け責任を指摘されて、交渉にも応じ、間接的な雇用責任を認めるようになってきたのを助役は知っていますか」と青木が、「埼基発第九二四号」(昭和五三年十二月六日、埼玉労働基準局長による『ビルメンテナンス業等における労働関係法令遵守について』)を助役に示して、市の元請け責任を免れることはできないと説いた。

「実情はよく分かりました。元請け責任があるかどうかは別にして、委託事業といえど、労働法規の違反は好ましいことではない。病院事務当局が雇用と労働条件の改善に努力すると言ってるなら、その方向で市としても努力するようにしましょう」と藤倉は物分り良く言った。

「そこまで分っているなら、どうして委託制度にこだわるのか。同じ病院の仕事をしていて、なぜ交換手や清掃が委託にされなければならないのか」と青木。

「市の業務にも市民サービスに直結するものと、それを補助するものがある。この補助的業務を委託化して財政負担を少なくすることが理事者の責任であり、越谷市の責任だ」

「補助的業務とはどういうことか。やってもやらなくてもいいということか。それでは市庁舎の電話交換や守衛はなぜ市の職員なのか、市の現業部門では市の職員が掃除をしている所もある」「どうでもいいということではなく、頭脳労働や技術を必要としない単純労働とか施設の管理・維持業務など、誰でもできる仕事という意味である。病院の主たる業務は医療であり、医師や看護婦が従事している。医療に付随した事務や検査も含まれる。清掃や電話交換、守衛、クリーニ

ングなどは直接医療に関係ない補助的業務ということで業者に委託している」

憲法や法律の上では職業に貴賤の別はないとされているが、この藤倉助役の発言は明確な職業差別である。

「それじゃお聞きしますけど、医療内容や医局への問い合わせや連絡、救急連絡などの交換業務は医療と何の関係もないんですか」と交換手が憤慨したように助役に問いかけた。

「私らの掃除だって、廊下だけ掃いてりゃいいというものじゃない。ほこりをたてないように気をつかったり、病室を清潔にするということ、患者さんの健康にも関係してるんじゃないですか」と渡辺も思いきったように言った。「普通の建物の掃除とは全然ちがうですよ。どうでもいい仕事かどうか助役さんもやってみれば分るんじゃないですか」

現場からの具体的な反撃にあつて藤倉は窮したようであった。「だいいち、何をもって補助的業務とし、何をもって直接業務と誰が判断するのか」と正木や小野田も追求した。

藤倉はしばらく押し黙っていたが、「それは理事者の判断です。部局の管理者や市長が判断して、補助的業務と考えたら、委託に出すのは我々の責任だ」と言い切った。

「ふざけるんじゃないぞ。あんたらの勝手な判断で、下請けが安くこき使われてたまるか」と警備員のヒロキが思わず大きな声で抗議した。

「助役さん、私らが委託だからといって、首切られても我慢せえと言うんですか」

水上が助役にすぎるようにして聞いた。助役は「そうは言っていない。要は業者の問題だ」と言い捨てると、立ち上がって退出をうながした。

「委託差別の元凶は島村市長だ。差別的、暴力的姿勢を改めるまで我々は闘うぞ。皆で隣りにいる市長に聞こえるようにシュプレヒコールしよう」

「委託差別を撤廃せよ」「市長は元請け責任を取れ」

「バカヤロー発言を謝罪せよ」

小母ちゃん達や交換手たちは精一杯の声を張りあげて大声で叫んだ。長年にわたる差別と苦しみを振り切るように必死で叫び続けた。

藤倉助役は制止しようともせず無視して書類を見ていた。隣の市長室からも何の物音もしない。シュプレヒコールは助役室を出てからも続けられ、閑散とした市長室周辺の廊下に広がっていった。

市に対する要求は組合員皆で



## 5. ピンハネ代は僅か30万円

四月十二日ついに東京ワックスとの団体交渉が実現した。土曜日の午後から病院当局には交完のための半ドンを通告して全組合員が集まった。

会社側からは三浦専務、吉田管理課長他一名。組合側は全組合員と市職三役、病院役員、埼委労東一分会員（＝当時）らあわせて三十余名。

山本の司会で団交は双方の自己紹介から始まった。会社はまず病院との協議で四月一杯は暫定的に業務を継続すること。従って、四月四日付「解雇通知」は撤回すると述べ、三浦は「皆さんにご心配かけて済まなかった」と頭を下げた。だが、「何故、契約を一方的に破棄して辞退届けを出したのか？」という質問には明確な答えが返ってこなかった。

「今さらさんざん安い給料でコキ使ってきて、組合が出来たら逃げだそうって言うのか」「なぜ組合ができたらやっていけないのか答えてみる」と、共闘会議の労働者から怒声があがった。三浦は何とか弁明しようとするのだが、要領を得ない発言に対して組合員や支援の側から五年間溜



まりに溜まった怒りの声が浴びせられ、三浦の発言はますます曖昧な弁解に終始した。「委託契約ですから、これくらいでやってくれと言われたら言いなりで引受けるしかないのです。……ですから、四千三百万の委託料では今の給料だって会社は赤字なんですから、組合ができるとしてもやっていけないと……」

「赤字だ、赤字だと言って会社は深谷に本社ビル建てているそうじゃないか。会社の資産を投げ出しても、会社は労働者に償いするべきじゃないか。熊谷に立派な社長の邸宅もあるんでしょうが」

市職副委員長の塩田が業を煮やして追求した。塩田は前年に栗原が職場でケガをして数ヶ月休んで、樺沢から解雇を言い渡された時、厚見課長に元請け責任をとらせて撤回させたことがある。

牛島や宇田川（当時退職）の解雇についても、誰が私信で解雇通知を郵送したのか、会社では誰も解雇通知を出した覚えはないという無責任さであった。休日出勤や就業規則の不徹底、生理休暇や有給



交渉は常に全員で会社側を追求した

休暇のないことなどの労基法違反や最低賃金法違反について、三浦は吉田「覚書」の通りその事実は確認したが、「とにかく委託料が安かったから」と繰り返すだけであった。

過去の不法な遺失利益や不当労働行為の慰謝料を払えという要求に対して、「自分一存では決められない」と当事者能力の無さをさらけ出して、組合員の怒りを再び買う有様であった。

結局、この日は次のような確認書を交わして、夕方近くになって交渉を終えた。

### 協約書

東京ワックス株式会社は長年の劣悪な労働条件等を深く反省し過去にさかのぼって根本的に改善することを確約致します。

一、昭和五三年～五四年度について越谷市から受けた委託料より越谷市立病院において支払った人件費及材料費その他の明細を提出する。積算した（額との）差額の支払については会社は支払意思がある。金額及支払方法については十四日に回答し団交で決定する。

二、昭和五一年一月十二日以降（病院開設と同時に同社に委託された日）より昭和五一年度、五二年度については上記（一）に準ずる。

三、昭和五五年四月一日以降会社が一方的に契約を破棄し且つ従業員の雇用について何の方策も示

さず放置して従業員に多大の不安を与えた事を心より謝罪致します。慰謝料などについては今後組合と話し合っていく。

四、現時点において会社は越谷市との委託契約の意志がなく且つ雇用の保障をなしえない。従って東京ワックス従業員全員の越谷市立病院における雇用関係が明確になるまで四月一日以降の賃金を保障する。

五、牛島はつ子、宇田川政喜、村松たまおに対する「解雇通知」については本日団交出席者のいずれもその事実を知らない。「解雇通知」を命令し作成した者を明らかにし命令者を処分する事及び「解雇通知」以降の賃金を支払うこと、ただし村松たまおについては労使で検討する。支払は四月三〇日までにする。支払方法は組合が指示する銀行口座に振込む。

一九八〇年四月十二日

東京ワックス株式会社 三浦守正

(捺印)

東京ワックス労働組合委員長 水上美之作 (捺印)

「会社は過去のピンハネ分、つまり市立病院で得た四年間の利益をすべて吐き出すといったが、一体いくらくらい払うつもりかね」と藤本が聞いた。

「経理内容をあっさり公表する約束したからね、幾らもないのかも分らないよ」と青木。

「それじゃ、弁償すると言ってても金は出さん積りじゃるか」と水上が心配した。はじめての団体

交渉で興奮気味の組合員も、このやりとりを聞いて不安気な表情を示し始めた。

「とにかく今まで、無茶苦茶安かったんだから、少しは弁償してもらわないとね」と笠原が皆の気持を代弁するように言った。

ピンハネや慰謝料については額を明らかにしえなかったが牛島らの不当解雇については撤回させ、過去数ヵ月分の賃金を獲得することができた。泣き寝入りせず頑張れば損はしないんだということを皆が具体的に知った。物取りも組合の成果であり、団結の証しとなる場合もある。この意味で、第一回の団交で組合員たちは初めて組合の存在意義を知ったとも言える。

四月十日に初めて正式の対市交渉が山崎事務局長と厚見管理課長を相手として持たれた。この交渉の中で、病院側は「過去の違法劣悪な労働条件について調査し、今年度は委託制度存続を前提にして、労働条件の改善がなされるよう新たな予算措置をとる」と回答してきた。

「病院が出来た当時、市では公立病院の管理費の平均から考えて年間五、三〇〇万円くらいの子算を考えていた。それで数社の指名参加願いがあったので競争入札したところ、四、三〇〇万円台で二社が格別安かった。業務内容や資本規模等を考慮して、そのうちの東京ワックスと契約を交わした。それ以降も、入札価格や業務内容で同社以上の会社がなかったので、今まで随意契約で任せてきた」

厚見課長はこのように東京ワックス落札の経過を話したが、四、三〇〇万円で当初三四人の従

業員を抱えられるものかどうか、子供でも計算したら分ることである。「無責任」「委託差別」と言われても仕方あるまい。

厚見課長の話では、現在交渉中の業者は三社。いずれも一応は業界での大手ビル管理会社だという。「就業規則もはっきりしており、労働法に従って労働条件もキチンとしている会社を選びたい。東京ワックスは強く辞退を主張しており、市としてもこんな事態を招いた責任上やらせるわけにはいかない」

直営化を要求する共闘会議としては、市の「業者選定」をやめさせることはできないが、結果としてすべての業者に指名願いを出させなければよいと判断した。このためには、名前の上がっている業者と何らかの形で接触し、現在の紛争状況と組合の要求を説明し、自発的に遠慮してもらうのが、上策ということになった。市が交渉中の業者名を知り、同時に間接的に業者をけん制するため、情報蒐集活動を開始することになった。

この日の夜、第二回目の東京ワックスとの団体交渉が病院の組合事務所で開かれた。会社側の顔ぶれは前回と同じであるが、三浦専務が社長からの委任状を示して「誠意をもって、お話をしたい」と言い、机の上に大きな風呂敷包みを置いた。「会社には何も隠すものはない。あらいざらい明らかにして、経費との差額があればすべて皆さんにお返しします」と、前回とうって変わって自信たっぷりに答えた。

三浦が持参した資料は、全員の給与台帳と市立病院関係の経費伝票であった。経費はお茶代やガソリン代に至るまで出金伝票に記載されている。その場で組合側がその是非を判断して計算できるようなものではない。給与台帳について、二、三の組合員の給与明細表とつき合わせたところ間違いのないことが分った。

三浦 委託料はすつとすえおかれていて五三年、五四年度で合計八六〇〇万円。経費は両年度で約八、五七〇万円ですから、その差額は約三十万円です。これは前回のお約束通り皆さんにお返しします。

「ふざけんな！ 今までのピンハネがたった三十万なんて信じられるか」という怒声が、共闘会議のメンバーから湧きおこった。

三浦 そう言われても、本当に三十万円しか差がないんですから。これには本社の管理費や人件費、利益は含まれていないのです……。

再び怒声と野次。小母ちゃん達も「何言ってるのよ」と開いた口がふさがらないと憤慨した。

山本 五〇年の契約に際して、病院当局は年間五、〇〇〇万の予算を組んでたんだ。それをあんたこと朝日ビル管理が四、三〇〇万円で入札したんだらうが、本来なら五、〇〇〇万円の金が労働者に賃金として支払われることになっていたのだから、その差額の七〇〇万円は労働者

からピンハネしてきたのと同じじゃないか。四年間で三、〇〇〇万円の損失を労働者が蒙ってきたのですから、それだけのものを償ってもらいたい。

三浦の赤ら顔がみるみる紫色に変わっていった。組合員たちも三、〇〇〇万という金額が突然出てきたので急に騒がしくなった。この要求額は事前に確認していたものではなかった。この日の病院交渉でダンピングの内幕が明らかとなったので、山本や安原が一つの目安として会社側につつけようという事になったのだ。この場で突然それを持ち出したのは、組合員の中には「会社も儲かってなかったんだから仕方ない」という諦めムードがあるのを一掃したかったからである。アドバルーンとして三、〇〇〇万円という金額は予想以上の効果があった。三浦からはそれまでの開き直ったような様子が消え、組合員は活気づいて発言し始めた。

三浦 そんな金額なんて、とても無理です。私じゃ要求としても受けきれません。

青木 やっぱりあなたじゃ交渉にならないでしょう。決定権のある社長に来てもらわなくちゃ、  
らちが開かないでしょう(三浦黙ってうなづく)。次回には必ず社長に来てもらって下さい。

来れないなら深谷の本社へこちらから出向きますからね。

「そうよ、みんなでバスで行くからね」「深谷の町中にビラを配って歩いてもよいわよ」と交換手や清掃員たちが三浦を責めたてた。三浦はついに「私の責任で必ず社長に来てもらうようにはします」と約束した。大きな拍手が組合員の中からまき起こった。大半の者が何年も働いているの

に社長の顔を一、二度しか見たことがない。社長が来たら今までのひどかったことを直接ぶちまけてやりたいと、組合員たちは日頃から話し合っていた。

この日の団交では、会社が意識的にダンピングしてきたこと。それは競争入札という制度で自治体から押しつけられたものであることが明白になった。三浦は「会社側としては競争入札をやめてもらいたい」とはっきりと確認書に記した。

## 6 初めてのストライキ

四月十六日、春闘統一行動として公務員共闘による全国的ストライキが行われた。越谷市職でも自治労本部の指令に従って二時限ストが予定されていた。

東京ワックス労働組合でもこれに同調してストライキをもって直営化要求を市当局に突きだし、市職労働者に支援を呼びかけることになった。このため、前日に全組合員がスト批准に賛成し、病院事務局に通告した。

「全員という交換もストをやるかね。ストやるのはそっちの勝手だから好きにしたらよかっ





べが、救急連絡を止めることだけは困るからな」と厚見課長が気色ばんで文句をつけた。

厚見とのこんなやりとりの後で、山崎局長が強く「保安要員を置くこと」を求めてきたので、文書をもって申入れてもらうことにした。組合もこの時点であまり事を荒立てないということ、交代で一名の保安要員を置くことにした。「救急連絡」と言っても、一般の患者からの救急

連絡は電話を受けてからしか分らない。受信してから、一般連絡や事務連絡だからと言って断わる訳にもいかない。なしくずしに交換業務をやることになってしまふ。もつとも、日中に一人の交換手が応答できる数は限られていから、通常の円滑な業務に支障があることは間違いない。それに病院の職員も救急・保安要員を除いて時限ストをやっているから、それなりに十分効果があるということになった。山崎事務局長が委託差別見直しに努力していることが分っていただけに、局長の申入れを無下に断わるわけにはいかなかったのである。

十六日午前八時、市役所玄関前の広場に約一千名の市職組合員が集まった。地区労働傘下各組合の代表や越委

労・埼委労東一分会も参加していた。

「すげえな、これだけの労働者が集まると一寸した壮観だな」とヒロキがうなった。

「ねっね、何を言ったら良いと思う。水上さんは何を喋るの」と藤本が緊張気味に傍の水上を振り返った。

市職から今日の集会の来賓として埼委労東一分会を代表して藤本に、東京ワックス労働組合を代表して水上にあいさつするよう頼まれていたのである。

県労評の浜田議長に次いで登場した藤本は、暑いくらいの春の陽をうけながら、トレード・マークの「東京クリナー」の警備外套をひるがえし、手を後に組んで半身に構えて朗々たる口調で演説を始めた。

「この敷島の糞土に受苦的労働によって虐げられた多くの委託労働者がいる。この私もその端々に位置する埼玉自治体委託者労働組合、そしてこの地において旬日前に結成されたばかりの東京ワックス労働組合がそれであります。とりわけ、市立病院の清掃業務に携わる労働者の多くは戦前、戦後を物言わぬ民としてひたすら、国家、社会のために受苦的労働を強いられ、委託差別に泣かされてきたのであります。しかし、今や彼らは立ち上がった。決然として労働組合を結成し、ピンハネ、ダンピングを欲しいままにしてきた、労働者の生血を吸う委託業者を叩き出し、直営化を勝ちとる決意であります。県労評のご指導、支援を受けながら、直営化を未だ勝ちとる



ことはおろか、留守番電話による無人化攻撃を受けている埼玉労一人では担い切れない闘いであります。万場の諸兄姉、働く仲間の支援・協力によってこの敷島の糞土を掻がす委託差別撤廃の闘いを勝利させてもらいたい。高壇、頭上からではありませんが、心は平伏低身の思いで切にお願ひ申し上げる次第です」

組合の決起集会としては聞きなれない古色ゆかしい大演説に対して、戸惑ったような拍手が湧き起こった。

「さすが藤本さんね、でもシキシマのフンドってなあに」と交換手の一人が聞く。「演説が立派すぎてワシらにはよう分らん」と中台も言う。清掃員たちも大きな拍手こそしたが、意味はよく分らないといった風であった。

「敷島というのは、日本を意味する沈詞で、糞土ってのは仏教用語で、汚れた糞まみれの世の中。つまり今の日本中が腐っているってこと言いたかったんじゃないの」とヒロキが解説した。壇上に委員長の水上と交換手の馬場、斉藤の二人が並んで立っていた。水上は、今までの低賃金と組合を結成した経過を話した。交換手は、半ば欺されたような形で市立病院に就職したいきさつや、会社の法律違反やダンピングの実情を訴えた。三人とも

緊張していたが、藤本のように恰好をつけて話すことはできない。それだけに必死で訴える様子が感動させたのであろう。一言つまるたびに激励の大きな拍手が湧き起こった。

司会の正木書記長が、

「市職としても島村市長の合理化攻撃に反撃するためにも東京ワックス労組の直営化要求を支持して共に闘っていきたいと思います。委託のことは職員に関係ないと言うんでなくして、明日は我が身ということで、ぜひ共に闘っていきたいと思います」と再度の激励の拍手をうながした。

万雷の拍手の波が市庁舎にぶつかり、木魂のように越谷中に広がっていくようだ。

「よかったね、バアちゃん。みんながこんだけ応援してくれるんだからみんなで元気出して頑張ろうよ」と渡辺が鈴木ミネに大きな声で言った。

「もち論だよ。じいさん残して死ねるか。まだまだ働かなきゃなんないんだから」とミネは腰を伸ばして周りの女たちにキッパリと言った。

「何だ埼委労って」と苦虫をかみつぶしたような表情で島村は側に立っている深堀秘書課長を振り返った。眼下の玄関前の総決起集会から嵐のような拍手が市長室の窓ガラスを震わせていた。

「越谷署の草刈さん（公安刑事）の話では、県立高校の警備員組合だそうですが、はねっ返りの若い者が牛耳っているらしい。県庁に押しかけては座り込みや団交強要をやっているらしいです

ね」と、深堀が地元の公安刑事から得た情報を市長にささやいた。

「市職の中にもはねっ返りはいるんじゃないか。何とかせにゃならんな」と島村は険しい表情で呟いた。

「委託も放ったらかしだったから、連中につけ込まれたんでしょう。連中がはね上がったらそのうち叩くチャンスも出て来ると思いますが」と深堀はずるそうな眼で市長の顔色を窺った。秘書課長に抜てきされるや、深堀は日曜祭日に島村の家を訪ねて、草むしりや車洗いを手伝ったことは周囲で広く知られていた。まさに、信長のゾウリを懐に入れて温めた藤吉郎以上の忠勤振りである。このようなやりとりが、この日あったかどうか推測の域を出ないが、深堀が市長の手となり耳となつて行動していたことは様々の事実によつて裏付けられている。(巻末資料参照)

「まあ何千人が集まろうと、本当に要求だけ取るまで闘い切らねば結局はアドバルーンに終つてしまふ」と佐々田麗門人が突然真顔で言い出した。「そうじゃないですか、藤本さん。あなたは先程、立派な演説をされたが、どれだけの人が高度成長に汚された糞土に訣別し、受苦の民と共に闘おうと決意してくれたと思いませんか。お座なりの拍手で有頂点になっちゃいけませんよ」「そりゃあ、そうですがね。やはり、多くの労働者が集まって氣勢を上げるのはそれ自体良いことでしょうが」

「いやあ、私にはそうは思えませんよ。頭数が多けりゃ闘えるというものではない」

麗門人や藤本猿田彦は、ストの後で市職組合員が中央の解除指令であったという間に職場に帰ってしまった後の、おびたらしいピラやタバコの吸い殻を片付けていたのだった。麗門人に反論されてしばらく黙っていた猿田彦は手を休めて「一句浮かびましたよ」と言い出した。

腰軽の盛りの春の吠えいくさ

ぬか六越えん夜警のやん八

「難しそうな歌ですね。ぬか六ってのは何ですか」

「毎年春闘の季節になると労働界のお偉方が大幅賃上げのラッパを勇ましく吹き鳴らすのが、政労間のマスコミ向けの争いだ。六パーセントの賃上げくらいで安易に満足なんかせず、夜警だけでも、やけっ八になって八パーセントくらい勝ちとって見せようじゃないかってな意味ですよ。ぬか六ってのは「抜かず六発」という精力絶倫のたとえなんですよ」

「さすが、教養がありますね。六発やるくらいの元気がないと大幅賃上げも出来ないという意味なんです」と、真面目な顔をして青木が相づちを打ったので夜警たちは大笑いした。

## 6 恥じて逃げ出す右翼総会屋

四月十八日、第三回目の対会社団交が開かれた。この日は初めて東京ワックス労働組合員自身で作ったピラが病院内で配られた。今までの情宜ピラはほとんど、原稿作成から印刷まで共闘会議で作られ、東京ワックス労組との連名で出してきた。東京ワックス労組単独のピラも初めてであり、何よりも四人の電話交換手たちが相談して作成し、印刷まで手伝ったのは初めてである。組合結成後、わずかに二週間で、何も知らなかった労働者が一人歩きできるようになってきたのである。率直に支援を呼びかけたこのピラは職員や入院患者にも評判が良かった。

昼休み、職場の窓から外の駐車場を見ていた山本は奇妙な男たちを見た。病院に似つかわしくない黒い背広を着た男たちが今しも三台の車から下りたってきたところであった。その中に東京ワックスの三浦専務や吉田課長が混じっていたからだ。

「ひょっとしたら暴力団を連れて来たんじゃないか」と感じた山本は清掃控室に電話を入れ、病院当局にも連絡しに行った。





「山崎局長、会社がへんな男を何人も連れて来たんだ。どうも暴力団らしい。団交に立ち合って下さいよ」

山本が急いで団交会場の組合事務所に行った時、丁度安原がやって来た。

「ほら、あれだよあれ、どうも暴力団じゃないかと思うんだ」と山本が安原に状況を話した。その時、駐車場の隅に止めてあった三台の車のまわりにいた十人余の男たちが一団となって階段を目ざしてやって来た。すでに顔馴染みになった三浦や吉田の前に立って、眼付きの鋭い恰幅の良い男が大腿で歩いて来る。濃紺の白綿のスーツにえんじのネクタイ、胸元から赤いハンカチが覗いている。そのまわりに精悍そうな若者が数人つきそっている。

「まてっ、お前らは何者だ」と、安原が大声をあげて東京ワックスの一団の後から階段を駆け上がり、三浦のそばにいた首領格らしい男につめ寄った。

「てめえこそ何だ、この野郎」とまわりの若者たちが怒声をあげて安原をとり囲む。

「何よあんたら、ここをどこだと思ってるのよ」とすでに暴力団が来ているという話を聞いているのか、氣丈夫な清掃員が男たちに食ってかかった。

「会社の人間ですよ。今日は副社長が来たから社員が心配してついでに来たんですよ」と三浦がニヤニヤして虚勢を張った。

「ふざけんじゃないぞ、会社の人間かそこのゴロつきか見ただけで分るんだ。社員というなら



団交に現われた右翼・大和会  
下は会社側代表（右2人目は井上弁護士）

身分証明書をみんな見せてみる」と山本が三浦に詰めよった。「とにかく、会社の人間だろうと何だろうと責任ある交渉員以外は入ってもらっちゃ困る。会社の取締役以外は絶対にお断りする」と安原は、すでに入口付近で心配そうにオロオロしている小母ちゃんたちの前に立って、男たちを睨みつけた。

男は傍の会社役員と覚しき大柄な男に「どうします」と聞いた。「交渉に来たんだから全員が入らなくてもいいでしょう」と大柄な男もったいぶってうなずいた。

暴力団風の男達が何か言いかけたが、縞のスーツを着た男が「いいからお前ら下へ行ってる。俺一人で大丈夫だからこんなガキら」とドスを利かして命令した。

管理課長の厚見がそこへやって来た。山本は、「この前の団交で労使問題に右翼や暴力団を介入させるような業者とは契約しないと約束したじゃないか」と噛みついた。

「オラが連れてきた訳じゃなし、暴力団かどうか分らないべ」と厚見は相変らずトボけている。「それじゃ、正体をはっきりするまで課長も団交に立ち会って下さいよ。第三者を介入させないと約束したんだから、それくらいは当然でしょっ」と安原。

「まあ、立ち会いくらいならな。オラは何も言わないよ」と厚見も洩々了承した。

この頃になってようやく、埼委労の若手組合員（当時）が何人かやってきた。程なく市職の三役や緊急動員で何人かの若手組合員たちが駆けつけてくれた。非番の看護婦の姿も幾人か見られた。「暴力団来たる」の知らせで支援の側も殺気だっている。後の方で、西部地区の夜警たちや麗門人、太田崎らが気合いを入れるためかプロレスごっこを始めた。

「それじゃ始めましょう」と山本が平静さを取り戻して言った。「今日は、会社側は社長を連れてくるという話だったが、誰方が社長さんですか」

「今日は社長の具合が悪いので、ほかの役員がみんな来ています」と三浦が言った途端に、「ぶざけんじゃないぞ」「社長はどうした、社長は」「仮病なんか使うなよ」と野次が一斉に飛んだ。

大柄な男がたって、呟やくような声で、「決して嘘じゃありません。その代わりに息子の私が責任を持って交渉させて貰います。副社長の古郡です」と自己紹介した。

「私は弁護士小林靈光です。会社側の代理人として交渉させてもらいます。今日はとにかく、円満に話し合いで解決したい。会社側としては精一杯誠意を示す積りですから、一つお手柔かに

願います」と物馴れたあいさつをした中年の男は、スキのない身なりに弁護士バッヂをつけている。さしずめ、商売繁盛の悪徳弁護士って感じだな、と安原は小林の太い眉と底光りのする落ちくぼんだ眼を見て第一印象を判断した。

暴力団の首領格らしき男は「総務部長の花木です」と名乗ったが、安原は信用しなかった。眼付きの鋭さ、身ごなしの一つ一つが素人らしからぬ凄味がある。若い者をアゴで指示する様子といい、どう見ても場数を踏んだ暴力総会屋か会社ゴロといった雰囲気である。花木は若い男たちの身分を聞かれて「みんなうちの社員ですよ。本社詰めの総務課が四人。あとは前橋と東京の営業所の人間だ」と答えた。

山本 赤字の会社にそんなに総務課の人間が沢山いるはずがない。それに花木さんは総務部長というお話ですが、お宅の会社には総務部長さんが二人もいるんですか。そんな大会社には見えませんがね。

花木 いや、総務部長は私一人じゃないですかね。

青木 ほう、そりゃおかしい。前回の団交で三浦さんは、賃金や一時金の査定は総務部長兼任の自分が責任をもってやってきたとおっしゃってるんですよ。

花木は素早く三浦を見たが、三浦はうつむいて冷汗を流しているように見えた。「何だおかし

いじゃねえか」「嘘つくんじゃないぞ」と、支援者からの野次が飛ぶ。

団交の中で花木は会社の内容をまったく知らないことが分った。就業規則を病院の従業員の誰も見たことがない。これは明らかに労働基準法違反である。

山本 一体、お宅の会社では就業規則はあるんですか。

三浦 もち論ありますよ。どこの現場でも採用時に見せているはずですがね……。

安原 花木さん、あなたは見たことがありますか。詳しい内容はどうなっていますか。

花木 ……俺は見たこともねえよ、そんなもの。

突然問いつめられて花木はまいったという表情で、笑いながら意外なことを言い出した。

花木 実は私は「政治結社大和会」の花木勉という者です。争議がこじれて困っているから、助けてやってくれと小林先生に頼まれて来たんですよ。

山本 厚見課長、これは重大問題ですよ。どうするんですか。

厚見 第三者は入れないことになってるんだから、花木さんに席を外してもらえば良いんだろう。それで交渉を進めたらよかんべ。

安原 それじゃ、花木元総務部長さんには隣の部屋で待機して貰うことにしましょう。いいですね古郡さん。

右翼を頼んで組合の要求を押し潰そうとした会社（というより小林弁護士）の思惑は完全に外

れてしまった。しかし、交渉の内容は前回から少しも進展しなかった。社長が地方出張中ということで連絡もとれず、息子の副社長には決定権がないようだった。

水上 会社はワックスをこれだけ使ったというが、ワシらはいつも足りんでやいやい言って、やと持ってきてもらおう有様だから信用できないです。

笠原 どうしても間に合わないから、こっちでダンボールを集めて売ったお金の中からワックスを買いに走ったこともあるんですよ。

差額があるかどうかで、話はややもすれば細かいところでのやりとりになりがちであった。現場の実感から言えば、金額は小さくても会社のゴマ化しがあまりにも目立つのである。だが、お茶代や文房具などの微細な支出の是非を追求してもラチはあかない。

山本 経費の明細はともかくとして、管理課に強制されてダンピングした結果、低賃金しか払えなかったわけだから、いずれにせよ会社と病院に責任がある訳じゃないか。

厚見 山本、何を言うんだべ。病院の方は、ちゃんと五千万の予算を用意したのにワックスの方で、これでやっていけません。法違反もしませんし、仕事にも支障を起こさねって言うから任せただんだべ。こっちの責任追求するなら、オラは帰るぞ。

安原 病院当局の責任は、改めて追求しましょう。厚見さんもムキになってムクれることないよ。理由はどうあれ、委託事業費を安く見積って落札したのは会社なんだから、適正な見積りな

ら当然法違反も犯さずちゃんとした給料は払っていた筈だ。その分だけ従業員に損失を与えたことは会社として認めますね。

会社は責任を認めたものの、補償額については回答を出し渋った。いったん休憩を取ることになって、小母さん達が、清掃控室から大量のおにぎり運んできた。交渉の合い間に何人かが交代で用意していたものだ。病院の看護婦や近所に住んでいる市職の女性組合員から菓子やサンドイッチの差入れもあった。長時間の団交の疲れをお互いにねぎらいながら、頬張ったおにぎりは塩辛い味がした。

「誰か、涙や鼻水をたらして握ったんじゃねえか」と市職の組合員が冗談に言ったので皆笑いこけたが、涙は案外本当だったのかも知れない。

ヒロキが一皿の握り飯と湯呑みを持って隣室に入っていた。すでに、何人かの埼玉労組員や市職の役員が花木と、談笑していた。ヒロキが飯と茶を出すと、古郡らはかたくなに遠慮したが、花木は「腹が減ったというより、疲れるよな」と大きな口を開けて握り飯を頬張った。

「いやまいったよ。あんな簡単にバレてしまうなんて思わ



何かあると皆で炊き出し（市役所玄関で）

なかったよ」と花木が笑いながら言った。

「アカの若い連中が暴れてるって聞いてたんで、骨の一本も折ってやれば大人しくなるだろうと思って来たんだ。それが俺の親父やお袋みたいな年の人がやってる。それも日給二、六〇〇円なんてうちの若い者の一〇分間の稼ぎだよ。こりゃやっぱり会社が悪いやね」

古郡や三浦はうつむいて黙っている。小林は苦虫を噛み潰したような表情であった。「何だなあ、一千万も出せば組合は勘弁してくれるんだろう。早いとこ話をつけてしまえよ」と花木は屈託なさそうに言った。

だが、再開後の交渉ははかばかしく進まなかった。古郡や三浦ははっきりした回答を示さず、愚図愚図しているばかりである。再開後はオブザーバーとして出席が認められた花木や小林弁護士はじれったそうにしている。夜になってから支援にかけた井上弁護士がもどかしそうに口を開いた。

井上 古郡さん、いいですか。会社が儲かっていようとなかろうと、はっきりした違法行為が幾つもあるんですから、基準法違反や最賃法違反で訴えたら、会社側は刑事責任まで問われるのははっきりしているでしょう。

小林さん。あなたと私はどうも立場が違うらしいが、私の言っていることは法律的に間違っていないことはお分りでしょう。あなたが責任をもって回答したらどうですか。それくらいの権限



は代理人としてあるでしょう。

誰かが「それくらいのことではしろよ。高い弁護士料取るだけが能じゃないぞっ」と野次った。

「誰だっ、今野次った野郎はこっちへ出てこい」と小林は血相を変えて怒鳴った。

「誰でもいいだろうが。あんたも雇われ弁護士なら、それくらいのことをしたらどうだ」と山本がやり返した。

「何をっ、貴様」と、小林が席をけて山本に詰め寄った。野次が飛びかい、会場は再び騒然とした。だが、安原と花木が平然として座り込んでいたので、座はようやく落ち着きを取り戻した。

青木 小林さんも弁護士だからムキになってもらっては困りますよ。どうしても今日、具体的な回答が出せないというなら仕方ない。あなたも副社長も決定権がないということだから、次回には必ず社長に出席してもらってやり直しましょう。今日のところは、基本的には過去の労働債権を支払うという意志と、今年度の事業委託がどうなるかと、組合の同意なく解雇しないということを確認してもらいたい。

会社側だけでなく、東京ワックス労組の組合員たちも疲れ切っていた。これ以上の交渉を全員で続けるのは困難であった。

花木は真っ先に事務所を出て、車の中でゴロ寝をしていた若い者を叩き起こし、古郡や小林らに乗せるとさっさと帰ってしまった。

すでに夜十一時近かった。バスはおろか春日部から先に電車もなかった。市職の組合員たちが車を用意して来て、幾組かに分れて送ることになった。朧月が春の宵闇の中でぼんやりと光っていた。疲れと不安とで誰も口をきく元気もなかった。

「あん時は家へ帰っても、みんな寝ていてね。そーっと入って布団にもぐり込んだよ」

農家の朝は早い。何人かの農家の主婦たちは当時の苦労を懐かしむように言っている。

だが、妻や母を心配して夜遅くまで帰りを待っていた家族も多かった。笠原や渡辺は母や夫たちとその日のことを面白く話してきかせた。

伊藤あぎの末っ子は都内の会社に勤めていて、「組合があるから給料が上がるんだよ」と励ましてくれた。

千葉とよは警察官をしている息子から「組合なんかに入ってストなんかするんじゃない」と叱られた。

「だけど会社はいなくなるし、皆と一緒にやっついていかないと仕事できなくなるじゃないか」と、とよは遠慮がちに息子に言った。この日はそれで済んだが、夜遅くなるたびに息子に文句をいわれることは、大正生れのとよにとって辛いことであった。

東京ワックス従業員の一人ひとりの生活環境や家庭は様々であった。幼い頃に子守に出されたり、他家へ売られていった人もいる。人にも言えぬ辛酸をなめつくして今日まで生きぬいてきた

者も少なくなかった。今は比較的恵まれている者も、戦前・戦後を通じて人並み以上の苦勞をしてきた者ばかりである。

だが、いくら苦勞をしても心まで卑屈になってはいない。人間らしい生活を望む気持ちと誇りだけは、東京ワックス労働者の多くが持っていた。だからこそ、度重なる深夜の団交にも誰一人として黙って帰る者はなかった。「ここで負けてたまるか」という最後の意地を一人ひとりがギリギリまで持ち続けていたのである。

この団交の後、今まで組合に入らないと頑張っていた責任者の権沢も組合に入ることになった。東京ワックスが過去の責任を認め、残留の意志がないことがはっきりした以上、権沢としてもこれ以上孤立を続けることが困難だと判断したのであろう。この日を境にして、組合員には少少のことでは負けないぞという自信が生れてきた。

## 7 東京ワックス観念す

四月二二日、越谷地区労幹事会は「東京ワックス労組支援」を正式に決定した。四月九日の幹

事会では、結成直後ということもあり「時期早尚」で見送られていたのだが、四月十六日の統一行動でのアピールが利いたものか、満場異議なく認められた。

当時越谷地区の争議組合として地区労が全面的に支援していた「東武・越谷自動車教習所労働組合」（全自交・委員長斉藤高）と同じく、全国的な支援が約束されたのである。共闘会議の支援労働者も増えつつあり、運動は除々に広がっていった。

四月二四日、新業者導入について病院当局と団体交渉を持つ。山崎事務局長と厚見課長から、「東京ワックスの契約辞退に伴って、四月末をメドに業者選定を続けてきたが、県内業者は組合を恐れて引き受けてくれるところがない。荒川に本社のある「榎日世」（内海静雄社長）だけが指名願いを出してきた恰好になったので、二五日に見積り合せをした上で五月一日より新業者導入を図りたい」という申し渡しがあった。

この三週間の組合員たちの必死の訴えにもかかわらず、島村市長があくまで委託制度存続を事務当局に命じたものであろう。山崎局長は苦し氣に「市の方針では」と繰り返し述べざるをえなかった。

あくまで委託制度を存続させようとする市当局に対して、組合は次のように要求した。

- ① 業者選定・委託契約にあたって組合の同意を得ること。
- ② 少なくとも直営化に準ずる大幅な労働条件の改善ができるような委託料の引上げ。

- ③ 不当なピンハネや倒産、賃金不払いの恐れのない会社を選ぶこと。
- ④ 前記については組合独自に調査・会社側との協議を行い、組合が納得するまで業者導入を強行しないこと。

この要求には「良い業者なら委託でもよい」というニュアンスがある。従来の「直営化」公務員化」という要求から見れば明らかに後退している。だが、組合は「直営化」要求を取り下げたはいいない。戦術的に後退したように見えても、これらの要求をキチンと追求していけば、必ず直営化につながるという確信が共闘会議側にあった。その根拠とは、

① 「良心的な委託会社」など制度的にも現実的にもありえない。「健全経営」は過大なピンハネなくしてありえない。ピンハネのない「良心的企業」があるとすれば、採算を度外視するか、本業以外に不正な利益をあげているからである。

② 従って、働日世が多く多くの委託会社と同じようにピンハネ企業であるか、もしくは何か悪どいことをしているか証明すれば、当局が契約資格としている「良心的で健全な企業」でないことになる。

③ 仮に可もなく不可もない会社であるとしても、組合活動が他の事業所にまで及ぶようなことになれば、あえて火中の栗を拾う業者は出てこない。

このような委託会社についての判断は、埼委労と雇用関係にあった県下の主要業者の今までの

対応から分析したものである。事実、日世以外の業者はどこも正式に指名参加願いを出してこなかった。

だが、東京周辺には一千軒以上のビル管理企業がある。大手を中心にしたビルメン協会に加入していない業者も多く、右翼や暴力団が関係する会社もある。その中には敢えて火中の栗を拾うことを業とする企業もなしとはしない。事実、この当時の俣日世の中心的な経営陣はこのような好戦的体質を持っていたのである。

共闘会議側でもこのような例外を考えなかったわけではない。しかし、当初から一切の業者選定を認めないということでは事務当局の立場を頭から否定することになり、一般市民の理解が得にくいという判断であった。このため、敢えて直営化一本槍ではなく、業者選定を認めておいて、結果的に契約する業者がまったくないという事態をつくり出す。この方が無理なく直営化を実現できるという判断であった。今から考えると、この判断には会社に対して、市長の基本姿勢についても甘かったといえるが、事態解決に必死で努力している山崎事務局長らの苦勞を敢えて無視できなかったのである。

業者導入の予定を明らかにしてもらいたいという組合側の要求に対して、病院当局は翌日になって五月一日の予定を十日からに延期すること。病院当局立ち合いのもとに、業者との事前協議（説明会）を早急に開くと回答してきた。島村市長は五月一日を主張したが、十分な協議のもと

に円満に業者導入を図りたいとする藤倉助役、山崎事務局長らが説得したということであった。

翌二五日昼休み、東京ワックス労組二十名と市職労、埼委労の支援合わせて数十名が病院玄関前のロビーに集まった。組合結成から連日のように病院内外でビラ配りをしてきた。だが、病院内で公然と看護婦や臨時職員らと団結して行動するのは初めてである。何事だろうと入院患者や外来患者たちが病室の窓からこの小さな集会を見下ろしているのが見える。

看護婦の浮田らがマイクを握って、委託労働者のあまりにひどい状態を知った驚きや、病院内での仕事の重要性をアピールしてくれた。七八年九月には慢性的な欠員があり増員闘争をしたこと。その時、市長が欠員に見合ったベッド数を削減し、病棟を閉鎖するため警官隊の力を借りて強制的に入院患者のベッドを移動させようとしたこと。市長の命を受けて点滴中の患者を病院の管理者たちが、病棟移転させようとしたのに対して看護婦が泣きながらベッドに取りついて阻止したこと、など島村市長の人を人とも思わぬ強権的な性格などが次々に暴露されていった。

これに続いて、職場毎、病棟毎に東京ワックス労組員がマイクをもって、入・外来患者に支援と理解を求める呼びかけを行った。この集会によって、患者や一般の職員が委託問題について具体的な関心を持つようになったのである。

「組合の役員だけでなく、知っている看護婦さんたちが参加しているのを見て、組合全体が委託

労働者を支援していることがはっきり分って、身近なものに感じるようになった」と、消毒係のある職員はこの集会の印象を今でもこのように述べている。

午後一時から、院内会議室において第四回目の東京ワックスとの団体交渉が開かれた。共闘会議の他に、越谷地区労の堀井議長や越谷自動車教習所労組の斉藤高委員長も参加し、東京ワックス

労組の闘いはようやく地域的、全県的な関心を呼び起こしつつあった。

すでに闘争の長期化が予想され、市当局の業者導入の予定も五月十日が最終期限とされた。

東京ワックスに対して何としても過去の償いを具体的に認めさせ、病院当局に対しても元請責任を認めさせなければならなかった。組合員は連日の交渉や行動にもめげることなく、今日こそ大幅な償いを勝ちとるまで団交をやりぬく決意であった。共闘会議では、過去の委託差別を病院の委託料の低さに責任転嫁し、自己の契約



集会前玄関病院



責任・使用者責任を逃がれんとする東京ワックスを追いつめるため、事務局長・管理課長の立ち合いを断固として要求した。山崎局長は「問題の早期解決のためにあえて仲介の労も辞さない」と労使交渉に当局が出席することに同意した。

出席を約束されていた社長は病氣のため出席できないということであった。その代り、会社は前回団交で「大和会」を連れてきたことについて謝罪し、「本日はいかなることがあっても会社の誠意を示して、解決に向かうよう努力します」と古郡副社長は述べた。

だが、「長年にわたって皆様にご迷惑をかけ、契約辞退で病院や皆様に混乱と不安を与えたことを重々反省して、過去の法違反などを誠実に償いたい」と古郡が長々と弁明して、提示した和解金はわずか百万円であった。

「三十七万円でなければやらせないと言われたら、業者としては赤字でも引き受けるしかなかった。お詫びはするが払えないものは払えない」と三浦は開き直りともとれる答弁を続けた。

「副社長さんは父親や母親が（自分の）小さい頃に二人で掃除の仕事を始めた。自分も手伝ってきたと言われとるが、あなたは大学まで行っとるんでしょ。ワシらの子供は誰も大学に行かせられななんだですよ。そのうえ年寄りを安く使ってきて何の弁償もせんで、あんまりひどいじゃないですか。二、三〇〇円でどんな暮しをして来たか知っとるんですか」と、六二歳になる清掃員が立ち上がって、涙を流さんばかりに声を震わせて訴えた。

「どうしても払えんていうなら、皆で本当に熊谷に行つて、どれだけひどい目に会つてきたか町中の人に知つてもらつてもいいのよ」と小母さんらが叫ぶ。

「百万いうても、守衛や交換さんもいれたら、みんなで三十人いるんですよ。一人三万円ぐらいもろうて、昔のことを忘れてくれつて言われても忘れられませんよ」と、水上がキツパリ古郡の提案を拒否した。

山崎局長が「これは病院が口出しすべきことじゃないが、三回も今まで団交してきてこれでは少しも解決しそうもない。病院としてもこのままでは困るから、一寸話させてくれんか」と発言した。さすがに東京ワックスの頑迷さに手をやいたという様子である。

「山本さん、こうなつたら味覚糖の件を暴露して、二重契約で告訴して当局の管理責任、市長の契約責任まで刺し貫ぬいて決着を迫るしかないんじゃないか」と、安原が山本や青木に目くばせして言った。

味覚糖事件というのは、春日部の製菓会社・味覚糖に月二度の割合で定期清掃（洗いワックス）に病院の従業員が派遣されていたことである。給料は病院事業所からもらい、病院の資材をもつて行く。完全な二重契約であり、このことが公になれば、会社側は刑事責任を追求され、一切の自治体委託から締め出しをくうであろう。病院当局としてもこのような病院財産を横領、契約違反を見逃していた管理責任が問われるであろう。しかも、このような二重契約は味覚糖だけ

ではなかった。このことのバクロ追求を恐れたからこそ会社は一方的に契約辞退をしたのである。それだけに、会社側の契約辞退の意志がはっきりしないうちは大っぴらにせず、会社団交においてもあえて口をつぐんできたのである。

安原 払えないとおっしゃるなら百万でも構いませんが、会社は民事責任だけじゃなくて、刑事責任まで問われても良い。市長は市財産の横領を見逃していたということで行政責任を問われても良いというわけですね。

厚見 おい安原さんよ。刑事責任だの、市長が横領を見逃していたのと隠やかじゃない話だぞ。

青木 もち論、隠やかじゃありませんよ。東京ワックスが市と民間会社で二重契約し、病



院の人間を他所で働かせて、しかもワックスやミガキ砂まで病院の物を他所で使っていたという事になれば、市有財の横領ということになるでしょう。市長にしても、そんな泥棒会社を知らずに五年間も委託業務を任せていたということになれば、当然重大な管理責任を問われるでしょうからね。

古郡 私にはさっぱり何のことか……。

安原 副社長が知らないっていうんですか。それじゃ専務が独断でやってきたのか。おい三浦、

お前が勝手に社長印を使って、味覚糖や佐藤医院と契約したって言うのか。どうなんだ。

安原に大声で追求されて、三浦は震えだした。小さな業務契約まで副社長が知らないことは十分あり得る。しかし、東京ワックスとして不正な契約をしてきた責任を免れることができないのが三浦には分っていたのであろう。

水上 副社長さんが知らないというなら、私が教えてあげますよ。私と笠原さんとで月に二度、味覚糖へ行行って洗いワックスをしてきたのは、吉田さんの命令ですよ。吉田さんが車で来て、病院の材料を持っていったこともあるし、二百円の手間賃を貰って電車で行ったこともあります。余分な仕事をしてもらっても給料はちっとも余計に貰ってませんよ。

渡辺 佐藤病院だって、ここの掃除が始まった時からずっと月二回二人も三人も行っていたでしょ。わたし佐藤さんの奥さんにガミガミ文句いわれてコキ使われて一銭も貰ってませんからね。

口々に不正な二重契約の事実を暴露されて、三浦はひきつけを起こしたかのように頬をびくびくと震わせた。古郡も青ざめて頭を抱えてしまった。

青木 どうしてそんな大それたことをしたんです。そうでもしないと四千三百万ではやっていけないからでしょう。

三浦 東部地区は吉田に任せていましたから、吉田が探してきたんです。病院だけでは大変な赤字なものですから、それくらいなら、病院の方がひまな時にやればいいと……。

山本 お聞きの通りですよ事務局長。管理課では、当初二三名で病院中の掃除をしろ、五名で電話交換しろ、しかも四千三百万でやれと押しつけた。会社はともやっつけていけないから、他所から仕事をとってきて、当初は全科開業してなかったから、多少人も余ったかも知れないので病院の人間を他所へ回した。二年目、三年目には忙しくなってきたのに予算は抑えられる。人員も減らせということで、交換も四名。清掃も十八名になった。それでは会社もやっつけていけないから不正行為を続けた。これが、病院の責任でなくて何なんですか。ワックスの社長が刑事責任に問われるくらいじゃ済む問題じゃないでしょう。根本に委託差別があるから、このような不正劣悪な労働条件が起こるんだ。委託制度そのものが業者にも労働者にも地獄を味わわせてるんじゃないか。

三浦と古郡は観念したように顔を伏せたまま何も言わない。山崎と厚見は苦虫をかみ潰したよ

うな表情でため息をついた。

ここに至って、ついに東京ワックスは観念した。隣室に引き上げた会社はかなり判断力を失っていた。厚見や山崎も事態の重要性に驚いたのか、会社側の結論を促した。組合員は長い待機の間「ガンバロウ」の歌を歌った。青婦部の役員で「宴会部長」の異名がある栗本が歌唱指導して、何度も歌っている内に、段々大きな声で歌えるようになってきた。今夜もすでに十時を回った。家の者にどう言うか、皆それぞれに悩みながら、不安を吹き飛ばすようにいつまでも大声で歌い続けた。

長い協議の後に会社が示した回答は「経営利益（ピンハネ分）、労働債権、慰謝料を含めて五百万円で一切の解決金としたい」というものであった。今度は組合側が別室に移って協議する番であった。

「五百万ならいいんじゃないか」「組合に払うというんだから二十一人で分ければ一人二十四万になる」という意見もあった。しかし、何年もの間、安い給料で辛い思いをしてきたこと。人に聞かれても恥ずかしくて、幾ら貫っているか言えなかったことなどを考えれば、「とても我慢できない」という思いが強かった。

それにしても、最初の回答が三〇万円であったことに較べれば大きな前進であった。頑張ればそれなりの償いをさせられるんだという自信を皆が持ったことは大きい。今日のところは、五百

万円の回答があつて、それを拒否するのではなく、不満として保留しよう。目前に新業者導入が控えているから、当面はその阻止に全力をあげよう。ワックスとの解決は、新業者導入を阻止してからでも遅くない、ということになった。一応その線で確認書を交わすことになった。

「東京ワックス従業員については組合の同意なく解雇しない」「五五年度も委託事業を継続する場合は労働条件について、組合との協約成立を前提とする」という前回からの保留条項について、会社側は再び確約を保留した。

すでに十時を回つて、十八日に続いて二度目の夜半の帰宅となった。だが、大幅な前進を勝ちとつただけに、組合員の表情は前回の消耗感と疲労が重なつた程の重苦しさはなかつた。

「早く解決してあげなければ、年寄りが可哀そうだ」と山崎が誰をせめるともなくポツリと呟やいた。